

先生方とともに
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉
高校版
2020
Volume 6

2月

VIEW21

ともに創る

特集

「学校教育デザイン」を描く 今と未来

主体的・対話的で深い学びへ
実践 アクティブ・ラーニング

家庭 はちのへ 青森県立八戸西高校 諏訪節子

英語・理科の合教科

東京都・私立新渡戸文化学園 にとへ 山本崇雄

指導変革の軌跡

兵庫県立姫路西高校

熊本県立熊本西高校



母校への誇りを胸に

生徒 私は3年間、陽介先生が担任のクラスで、毎日楽しかったです。1年生の時には先生のアイデアで、クラス全員が1人ずつ、クラスメートの誰かの名前が書かれているくじを引き、該当するクラスメートに自分で考えた賞を贈り合いましたよね。あの活動でクラス全員を深く知ることができ、団結力が一気に強まりました。

先生 みんながお互いを認め合い、思いやりのあるクラスになることを目指して提案したんだ。1年生のクラスがよければ、2・3年生でクラス替えをしても、各自がよいクラスをつくらうとするでしょう？ そうすれば、素晴らしい学年になると考えたんだ。

生徒 その通りになったと思います。私は、1年生のクラスで先生を含む全員の一体感に感動して、2年生のクラスではルーム長に立候補し、生徒同士はもちろん、担任と生徒の距離も縮まるよう、担任の似顔絵つきのケーキを作るなど、いろいろな活動を頑張りました。

生徒 先生は、「福高生は社会のリーダーになるんだ」とよく言われていましたよね。自然とその心構えが身につくについて、部活動では、部長として周りの見本となろうと頑張ってきました。それが大会での実績につなが

り、スポーツ推薦入試で志望校に合格することができました。進学先でも自分をさらに磨き、先生のように母校の教師になりたいと思っています。

先生 その言葉は、うれしいよ。福高で学んだことを社会に出て生かすことこそが大切であり、それが先生の伝えたかった校訓の「世のためたれ」の意味なんだよ。

生徒 先生が一人ひとりを見て、声をかけてくれたことは、大きな支えでした。私は、部活動と学習の両立が大変で悩んでいた時、先生から、「今が辛いなら、一度区切りをつけるのもよいのではないか」と言われ、退部する決心ができました。部員に私の思いをしっかりと伝えられたおかげで、退部後もよい関係を続けることができ、勉強にも集中できました。

先生 先生自身、この学校で素晴らしい友人や先輩・後輩、先生方と出会い、自分を成長させることができました。みんなにもそうした高校生活を送ってほしいという思いが、教師としての根底にあります。1年生の時から目標を持ち、勉強も部活動も頑張る夢を実現させたみんなは、先生の誇りです。卒業後も次の目標に進むみんなを応援していくよ。

菅野陽介先生 教職歴14年。同校に赴任して4年目。3学年担任。SSH部。柔道部顧問。

福島県立福島高校 全日制/普通科/共学/1学年約320人/2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東北大、福島大、東京大、一橋大、京都大、大阪大、福島県立医科大などに225人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ299人が合格。

2 特集

「学校教育デザイン」を描く 今と未来

- 4 **先進事例1 静岡県立御殿場高校**
自校の現状分析を踏まえて学校教育目標を策定し、学科・教科横断で指導改善を推進
- 8 **先進事例2 広島県立府中高校**
教師一丸でルーブリックを作成し、単元ごとに目標・指導・評価を一体化
- 12 **先進事例3 高知県立高知丸の内高校**
生徒や他教科とともに授業改善を進め、アセスメントで検証、次年度計画に生かす
- 16 **現場のリアルと展望 「カリマネの壁」を乗り越えるために**
- 20 **現場へのメッセージ 「これからの生徒、これからの教師」**
- 20 **東京都立西高校 寺島 求**
教師が本質を問い、凡事を徹底させる中で生徒は志を抱いていく
- 22 **福岡県立福岡高校 深江一美**
変化を楽しむマインドを持ち、学校を超えて生徒も教師もつなげたい
- 24 **山梨県立吉田高校 高保裕樹**
教師と生徒が時にぶつかり合い未来をつくる場所——それが「高校」

今月の表紙メッセージ

ともに創る

◎本誌は、新学習指導要領に関する2016年12月公表の中央教育審議会の答申をいち早く踏まえ、17年6月号の特集で、自校の生徒への育成を目指す資質・能力を明確化し、それを育む営みを「学校教育デザイン」と名づけ、その必要性を指導要領公示前に提言しました。それを描くためには十分な時間が必要だと考えたからです。この3年間に取材した、「学校教育デザイン」を描いた学校の共通点は、資質・能力ベースの学校教育目標を、教師のみならず、生徒はもちろん、保護者や地域など、様々な立場の人とともに創り上げていた点でした。それはまさに「社会に開かれた教育課程」に通じること。今号の特集で「ともに創る」意味を、ともに考えていただけたら幸いです。『VIEW21』高校版 編集長 柏木崇

26 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

- 26 **家庭**
青森県立八戸西高校 諏訪節子
グループワークや実習・実験を通して、社会で生きていく上で必要な表現力や協働性を育む
- 30 **英語・理科の合教科**
東京都・私立新渡戸文化学園 山本崇雄
教科の知見を生かした問題解決型学習で、自律的な学習者を育てる

34 指導変革の軌跡

- 34 **兵庫県立姫路西高校**
SGHを軸にした学校改革
探究学習を通して、困難に立ち向かう姿勢とメタ認知能力を育む
- 38 **熊本県立熊本西高校**
外部連携、校務改革
大学・専門学校と連携した独自の体験授業で、生徒の進路・学習意識を向上

42 改良! 指導ツール ビフォーアフター

指導ツール改訂の意義

46 学校を飛び出し、学びを巡る 高校教師 study-tour

大学院のSTEM / STEAM教育
価値創造への情熱をデータとともに他者へ伝え、協働して未来を創る

48 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

- 48 **高知大学 地域協働学部**
地域の実態を把握し、住民とともに地域の未来を支える人材を育成
- 50 **甲南大学 知能情報学部**
AI時代に求められる人材育成を目指し、知能に関する知識・技能と人間力を育む

52 これからの会議・研修のあり方、つくり方

読者の声に応える
これからの会議・研修のあり方を実現する
ファイナルヒント
「三四郎の学校」事務局長 日賀優一

54 特別レポート

ベネッセコーポレーション「現代人の語彙に関する調査」結果分析
高校生の「探究的な学習活動」への取り組みは「語彙力」の高さに影響

56 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「生徒の反応がすべてである」
石川県立金沢桜丘高校 崎山寛之

<https://berd.benesse.jp>

本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます。

印刷 / (株)協同プレス 製本 / 日宝綜合製本 (株) 編集協力 / (有)ペンダコ 執筆協力 / 佐藤 智、中丸 満、二宮良太、長谷川敦 撮影協力 / 荒川 潤、川上一生、田中秀和、筒井岳彦、ヤマグチイキ

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。
*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。
©Benesse Corporation 2020

SDGs
企業の海外進出

グローバル化

インバウンド

新しい時代に求められる
資質・能力の育成が
必要に

社会環境の変化

社会保障費の増大

少子高齢化

地方創生

労働力不足

5G

技術革新

AI

Society5.0

特集

「教育デザイン」を描く 今と未来

高大接続改革及び、その具体的方策の1つである学習指導要領の改訂をいち早く踏まえ、本誌は、2017年6月号の特集において、自校の生徒への育成を目指す資質・能力を明確化し、育成するための学校改革の営みを示す「学校教育デザイン」(*)を各校が描き、その実現を図る必要性を提言した。

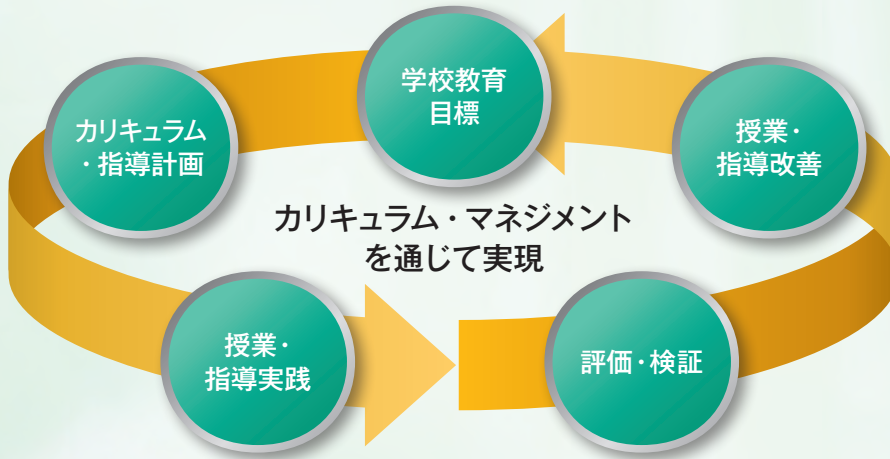
以来、多くの学校で「学校教育デザイン」にあたる取り組みが見られ、その実践の一部は、本誌18年4月号より連載を開始した「改革事例から導く!『学校教育デザイン』を描く道標^{しるべ}」で紹介してきた。

提言からまもなく3年という節目を迎えるにあたり、今号では、「学校教育デザイン」を描き、それを実現する意義と多くの学校が直面する課題について、先進事例や実践者の声を基に振り返る。

*「学校教育デザイン」とは、本誌が2017年度6～12月号の特集で提唱した、「学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営み」のこと。

自校の生徒への育成を目指す資質・能力を明確化し、
それを育むための学校改革の営みを示す

「学校教育デザイン」



「学校教育デザイン」を描き、その実現を目指す学校の増加

3校の先進事例

静岡県立
御殿場高校 P.4

広島県立
府中高校 P.8

高知県立
高知丸の内高校 P.12

実践事例から見てきた、「学校教育デザイン」の実現の鍵を握る
カリキュラム・マネジメント

現場のリアルと展望

「カリマネの壁」を乗り越えるために P.16



学校

学校改革・指導改善に不断の努力を重ねる学校現場へ
3人の教師が送るメッセージ

現場へのメッセージ



ベテラン教師から
東京都立
西高校
寺島 求
もとむ
P.20

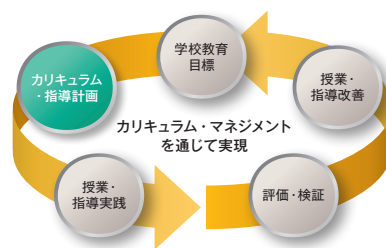


若手教師から
福岡県立
福岡高校
深江一美
P.22



管理職から
山梨県立
吉田高校
高保裕樹
たかほゆうき
P.24

静岡県立御殿場高校



自校の現状分析を踏まえて学校教育目標を策定し、学科・教科横断で指導改善を推進

静岡県立御殿場高校は2018年度、カリキュラム・マネジメントを推進する体制の整備に着手し、教師間での議論だけではなく、生徒や保護者、地域の声も取り入れながら、育成を目指す資質・能力を練り上げていった。あらゆる教育活動を通して、学校教育目標として掲げた資質・能力を育成できるよう、全学科・教科を横断した取り組みを強化している。

学校・生徒の実態を多角的に把握し、学校教育目標を策定

静岡県立御殿場高校は、創造工学科・創造ビジネス科・生活創造デザイン科の3科から成る学校だ。以前は、各科が独自に方針を立てて教育活動を行うことも多かったが、2018年度から、カリキュラム・マネジメントを推進する体制の整備に力を入れている。渡森和彦副校長は、その背景を次のように語る。

「19年度から『高校生のための学びの基礎診断』の実施が始まり、22年度からは新学習指導要領が年次進行で実施されるなど、高校教育改革

における具体的方策の実行が続きます。そうした大きな変化に学校が適切に対応するためには、カリキュラム・マネジメントを通じて全教師が目線を合わせ、教育活動を充実させていく必要があると考えました」

最初に取り組んだのは、教育活動の構造化だ。同校が大切にしてきた教育活動が、新しい時代に必要なら「21世紀型能力」や「生きる力」にどのように結びつくのかを教師間で議論し、それらの関連性を図示した「学びのピラミッド」(図1の下)を作成したと、教務主任の菅原尚規先生は説明する。

「学校全体の教育のあり方を考え

るためには、各教育活動の個別の役割だけでなく、それらの相互のつながりを意識することが重要です。教師一人ひとりに教育活動を構造的に捉えてほしいと考えました」

次に、同校が具体的にどのような資質・能力を「21世紀型能力」「生きる力」として位置づけるのかを検討するため、教師間ではまず、学校・生徒それぞれの強みと課題を協議した。例えば、学校の強みとしては、「進路指導と生徒指導を両輪とする生徒育成の柱が整っていること」などが挙げられ、力を入れている取り組みの意義について改めて共通認識を図れる機会になったと、服装指導「服育」

静岡県立御殿場高校

- ◎ 校訓に「質実剛健にして美しく」を掲げる。
- ◎ 工業・商業・家庭の3科を擁する県内唯一の専門高校。専門教科の学習を通して「地域の未来を創造する人材」を育成している。
- ◎ 設立 1902(明治35)年
- ◎ 形態 全日制/創造工学科・創造ビジネス科・生活創造デザイン科/共学
- ◎ 生徒数 1学年約200人
- ◎ 2019年度進路実績(現役のみ) 私立大は、文教大、千葉工業大、関東学院大、横浜商科大、常葉大などに11人が合格。短大、専門学校進学51人。就職124人。
- ◎ URL <http://www.edu.pref.shizuoka.jp/gotenba-h/home.nsf>

担当の小川修平先生は話す。

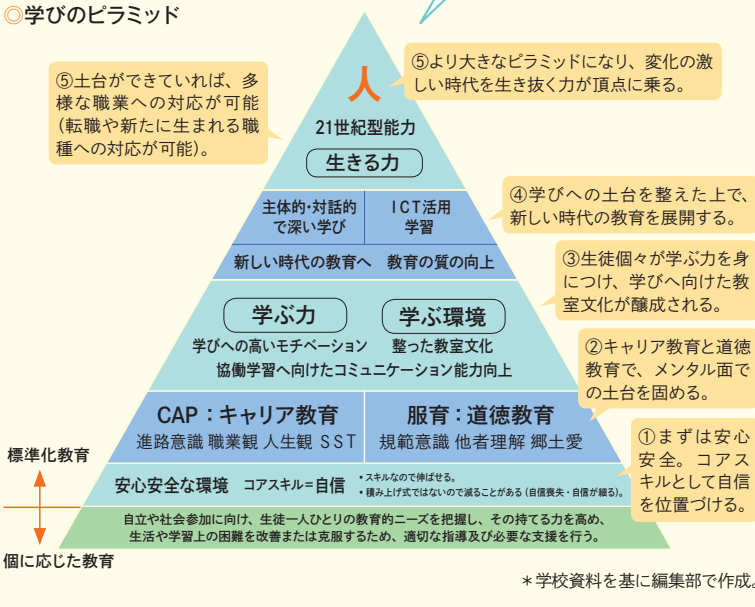
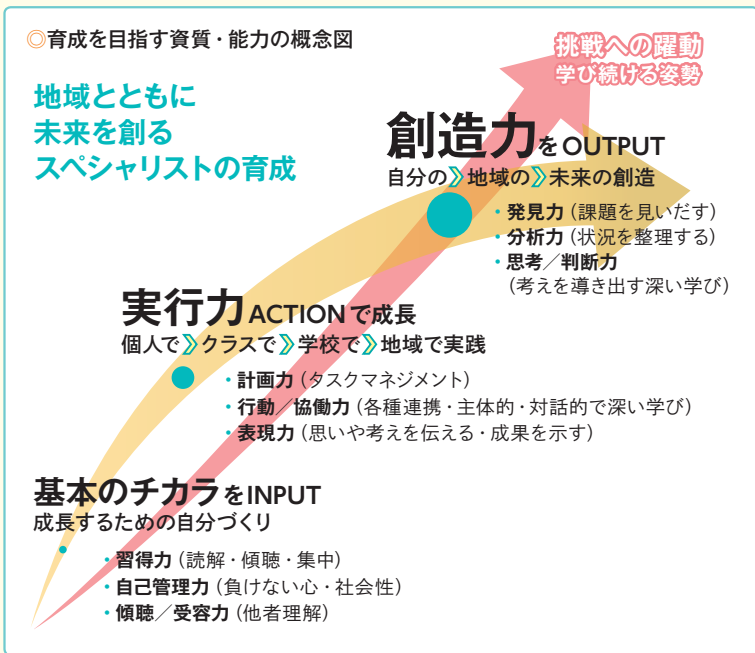
「身だしなみの大切さを自覚できる生徒を育てるという方針を3科で共有し、『服育』に取り組んでいます。教師一人ひとりが、服装に課題があ

「学校教育デザイン」を描く今と未来



る生徒と向き合い、何が、なぜ課題なのか、振り返りを行わせることに重点を置いています。そうしたきめ

図1 御殿場高校が育成を目指す資質・能力



細かな生徒指導は、今後も継続・発展させていこうと、全教師の考えが一致しました」

学校の実態を多角的に把握し、育成を目指す資質・能力を検討できるよう、教師以外からも考えを聞いた。例えば、生徒の保護者や卒業生が就職している地域の企業に、同校に育成してほしい資質・能力についてのアンケート調査を実施したり、生徒

会の役員や1・2年生の学級委員らが、「なぜ、御殿場高校に入学したのか」「卒業後、どのような自分になっていきたいのか」などを語り合うワークショップを行った。

そして、一連の検討の結果を総合し、「地域とともに未来を創るスペシャリストの育成」というスローガンを打ち出すとともに、その実現に必要な資質・能力として、「習得力」

「計画力」「発見力」などの9つを設定した(図1の上)。

「特別活動も含めた様々な教育活動の目標として設定できるものになるよう、資質・能力の名称にこだわりました。例えば、『読解力』ですが、本校での指導の中で大事にした『傾聴力』『集中力』と合わせて、技術や知識を身につける力『習得力』としました」(渡森副校長)

図2 新学習指導要領に対応させた教育課程編成表の例（第1学年「公共」）

学習指導要領 大項目		A 公共の領域				
学習指導要領 中項目		(1) 公民的意識の涵養	(2) 社会規範の意識の涵養			
単元・行事名 例1		公民的意識の涵養	社会規範の意識の涵養			
大区分	中区分	科目・特別活動の視点	実施時期			
御高として育成を目指す資質・能力	基本の力 実行力	習得力	教科書の文章や図表、グラフを正確に読み取り、情報を理解する。	◎	◎	
		自己管理能力	—	—	—	—
		傾聴・受容力	他者の意見や主張を聞き、受け入れる力	○	○	
		計画力	—	—	—	
		行動力	—	—	—	
		協働力	課題解決に向け、グループワークに参画する力	◎	◎	
		表現力	自らの考えを論拠に基づき主張する力	—	○	

同校が育成を目指す資質・能力の中から、各教科・科目の単元ごとに特に育成を目指す資質・能力を◎や○で表示。特別活動についても同様に作成する。また、新学習指導要領の理念である「社会に開かれた教育課程」を実現すべく、「地域の物的資源を活用した学び」「地域の人的資源を活用した学び」などの項目も設けた。*学校資料を基に編集部が一部改編。教育課程編成表「公共」の全文は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) でダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

業・数学・物理の

習内容を聞き、工

解と密接にかかわ

る数学や物理の学

業・数学・物理の

習内容を聞き、工

解と密接にかかわ

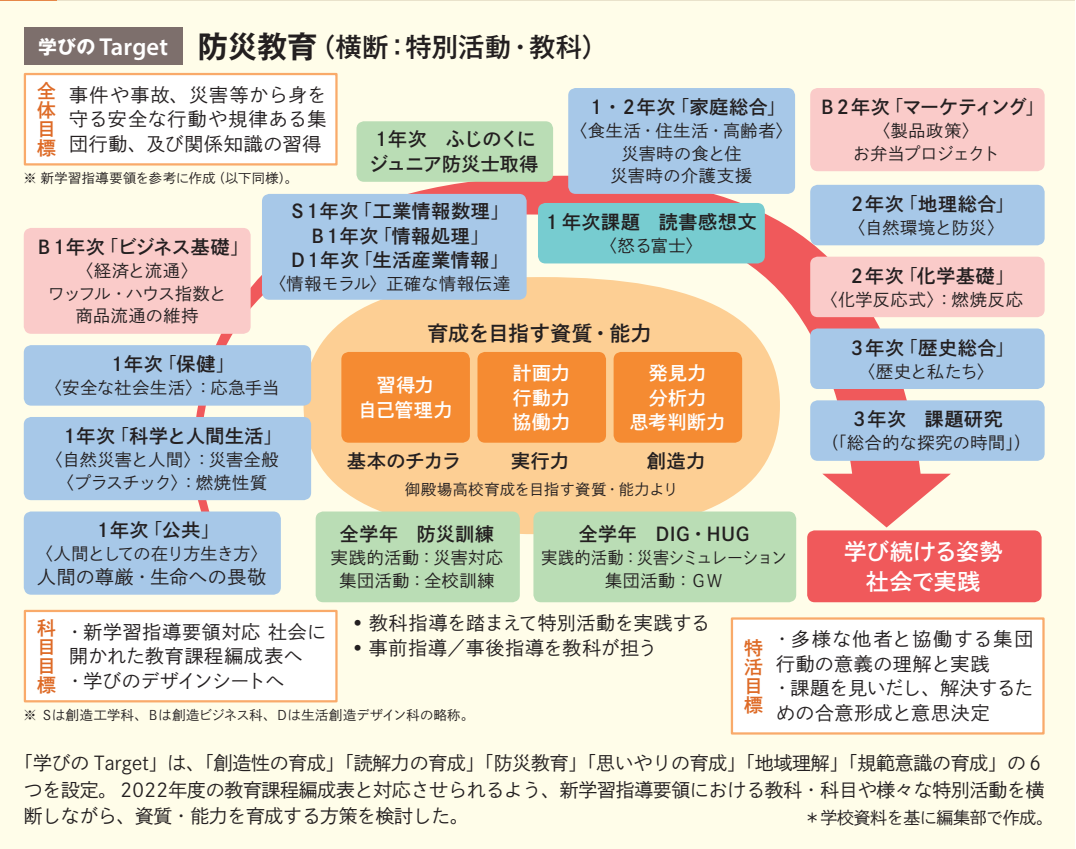
る数学や物理の学

多様な教育活動を関連づける「教科横断推進研修」

育成を目指す資質・能力の具体化により、全校体制での資質・能力ベースの指導改善が本格化した。例えば、各教科団では、必修教科目を中心に22年度1学年からの教育課程編成表(図2)を試作し、新学習指導要領で学習する各分野・単元において、

同校が策定した9つの資質・能力のうち、どの資質・能力を育成するか、その対応などを示した。資質・能力の育成を軸に据えた、教育活動の関連づけも強化している。その原動力となっているのが、年数回、全教師から希望者を募って実施する「教科横断推進研修」だ。同研修は、17年度、地理歴史・公民科や数学科といった普通教科の若手教師やミドルリーダーが始めた。当初の参加者は普通教科の教師のみだったが、普通教科の教師は専門教科の教師一人ひとりに声をかけ、参加を働きかけた。例えば、工業科の教師には、授業で製作する様々な機械の図面を見せてもらうとともに、図面の理解と密接にかかわる数学や物理の学習内容を聞き、工業・数学・物理の

図3 「教科横断MAP」の例



* 美那川先生のご実践は、本誌2019年6月号P.10~13でご紹介しています。

「学校教育デザイン」を描く今と未来



写真 19年10月の「教科横断推進研修」では、教師たちが各教科団で試作した教育課程編成表や各教科の新学習指導要領などを参照しながら議論。研修の最後に、グループごとに練り上げた「教科横断MAP」(図3)を発表した。

「読解力や論理的思考力など、全教科で育成される資質・能力は多くあります。教科を横断した研修を強化すれば、そうした資質・能力のさらなる育成につながります。普通教科の授業は3科すべてに設置されているため、まずは普通教科の教師が動き、各科の教師に働きかけました」

全教師の3分の2にあたる約30人が参加した19年10月の希望研修では、重点的に取り組むたい「学びの「Target」として、「創造性の育成」「読

解力の育成」「防災教育」などの6つの観点を設定。教師は観点ごとに教科混合の5人1組のグループに分かれ(写真)、各観点における目標を達成するため、3年間を通して各教科の授業や特別活動をどのように結びつけ、どんな資質・能力を育むのかを体系化した「教科横断MAP」(図3)を作成した。今回の研修を主導した情報研修課の神谷隼基先生は、そのねらいを次のように語る。

「一つの教育活動ですべての資質・能力を育成することは難しいため、どの教育活動で、どんな資質・能力を育成するのかを明確化した上で、様々な教育活動に取り組みする必要があります。先生方がそうした意識を持ちやすくなればと思います。教科や特別活動の枠を超えた観点を設定しました。今後は、授業や特別活動などを通して、生徒に『学びの「Target』の内容をどう学ばせるのか、具体的に検討しようと考えています」

生徒の実態に応じた工夫で、キャリア教育を充実させる

既存の取り組みも、資質・能力の育成の観点から見直した。その一つ

が、3科が共通して全学年に設置する学校設定科目「キャリアプランニング(以下、CAP)」で行われているキャリア教育だ。以前はプリントを用いて、職業の内容を調べる学習などが中心だったが、19年度からは、生徒の実態に応じて各学年で取り組みを工夫している。例えば、19年度2学年の1学期には、SNSの活用方法を取り上げ、SNSでのトラブルについての新聞記事を読解・要約させたり、グループでSNSの活用方法を議論させたりしたと、「CAP」担当の坂本泰三先生は話す。

「新聞記事を読解・要約すれば『習得力』、議論をすれば『表現力』や『思考/判断力』などの育成につながります。『CAP』を通じてどんな資質・能力が育成できるのか、学年団で協議し、取り組みを充実させています」

20年度3学年の「CAP」では、「発見力」「分析力」などを向上させるため、生徒が御殿場市の課題と向き合う探究学習を導入する予定だ。

資質・能力の評価方法の検討に力を入れていきたい

一連の指導改善の成果は、大きく

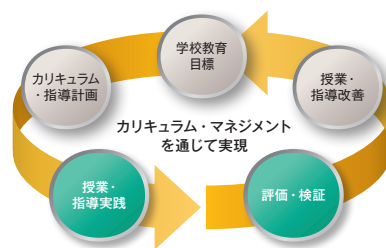
実を結んでいる。例えば、生徒が学習内容を深く理解しようとする姿や、授業中に積極的に学び合いをする姿や、授業内容を休み時間に友人に質問する姿が見られるようになった。また、定期的に実施する「高校生のための学びの基礎診断」では、学力を伸ばす生徒が増えている。資質・能力ベースの指導によって学習意欲が高まると、それが結果につながっていることがうかがえる。

3科間での連携が進んだことも、大きな成果だ。19年度からは、3科の協働による商品開発に挑戦していると、工業科の坂本貴志先生は話す。

「まず、生活創造デザイン科の生徒が、商品となる料理を作り、そのパッケージをデザインします。そして、創造工学科の生徒がデザインを形にし、創造ビジネス科の生徒が販売戦略などを練り上げます」

今後は、資質・能力ベースの指導改善をさらに推進していく。

「本校の指導改善は緒に就いたばかりであり、資質・能力の評価方法の検討など、課題も少なくありません。今後も先生方と議論を重ね、全校体制で取り組んでいきたいと考えています」(渡森副校長)



教師一丸でルーブリックを作成し、 単元ごとに目標・指導・評価を一体化

広島県立府中高校では、広島県教育委員会からの研究指定を機に、指導改善に着手した。当初から一貫して目指しているのは、学びを自律的に進めていく生徒の育成だ。育成を目指す資質・能力を、ルーブリックを作成して単元ごとのシラバスに落とし込み、単元内で指導改善を機能させる仕組みを構築した。

「動詞」に基づく整理を通して、 資質・能力の概念が浸透

広島県立府中高校は、2015年度、広島県教育委員会「広島版『学びの変革』アクション・プラン」の「探究コアスクール」（以下、「コアスクール」事業）に指定されたことを機に、自校が目標とする生徒像の育成に向けて、資質・能力ベースの指導改善に取り組んできた。現在は、育成を目指す資質・能力を教科・科目の単元ごとに設定して教育活動を行い、その評価・検証を基に、さらなる指導改善を行う仕組みを構築している。教務主任の見浦進理先生は、

一連の取り組みのねらいを次のように説明する。

「定期考査でも、出題範囲が広いと、それだけで学習を諦めてしまう生徒が目立つようになっていました。そこで、生徒の意識を変えようと、指導改善のプロセスでは、教師については『評価』、生徒については『振り返り』の強化を目指しました。学習の計画を立てて、実践し、見直して、改善するといった学びのサイクルを、自ら回すことができる生徒を育てるための仕組みを作りたいと思ったのです」

「コアスクール」事業の指定初年度は、「総合的な学習の時間（以下、

総合学習）」において育成を目指す資質・能力を、プロジェクトチームで明確化した。主幹教諭の中居寛美先生は、立ち上げ時の苦労をこう語る。

「当時の私たちは、資質・能力という言葉になじみがなく、広島県教育委員会の研修会に参加したり、関連書籍を読んだりするなど、育成を目指す資質・能力の言語化を手探りで始めました。そうした中で、資質・能力は、本校の教育理念である『知・徳・体』のバランスが取れた生徒を育成するための第一歩であるという理解に至りました」

そうして、「○○する」と動詞の形を用いた「学びの評価表」（図1）

を作成して、育成を目指す資質・能力を整理し、16年度は総合学習の指導改善に着手した。

「なじみのなかった資質・能力という概念は、『学びの評価表』によって教師間に徐々に浸透していきました。同表は、生徒にも配布し、総合学習を通じてどんな資質・能力が身につくのかを、生徒が意識できるようにしました。16年度の卒業式では、卒業生が答辞で、『日々の学習で自己を見つめ直し、さらなる高みを目指すことができてよかった』と述べていました。それがともうれしく、指導改善を進める原動力にもなりました」（中居先生）

「学校教育デザイン」を描く今と未来

教育活動共通のルーブリックを教師全員で作成

17年度には、資質・能力ベースの指導を教科にも導入し、教師が自分



主幹教諭
中居寛美
なかい ひろみ
教職歴30年。同校に赴任して12年目。



教務主任
見浦進理
みaura しんり
教職歴22年。同校に赴任して8年目。



教務部
藤井智美
ふじい ともみ
教職歴10年。同校に赴任して6年目。

広島県立府中高校

◎校訓は「知性・探究・使命」。2018年度、広島県教育委員会「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」の指定を受ける。2年生全員が海外修学旅行でアメリカ・ハワイ州の姉妹校を訪問するなど、国際教育にも力を入れる。

- ◎設立 1912（明治45）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎2019年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、神戸大、鳥取大、島根大、岡山大、広島大、九州大などに99人が合格。私立大は、明治大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ316人が合格。
- ◎URL <http://www.tucyu-h Hiroshima-c.ed.jp>

の授業で、どのような資質・能力を育んできたのかを学期ごとに振り返る機会を設けた。

「その頃には、『〇〇する』という

動詞は、教師間でかなり浸透していました。ただ、各教科・科目が立案した指導計画を見ると、教師ごとに動詞の定義が異なり、動詞を基に視線を合わせて指導計画を立てるのは難しいと感じました。そこで、指導計画の立案にこだわるよりも、実践後の振り返りに重きを置くことにしました。指導計画が多少粗くても、そこで歩みを止めずに、実践後に『この授業で育成を意識していたのは、〇〇だった』などと教師同士で語り合うことが、指導計画の改善につながると考えました」（中居先生）

ための評価の開発に着手し、ルーブリックを作成した。教務部の藤井智美先生は、当時の様子をこう語る。「夏季休業中に全教師が参加し、グループごとに生徒のよい点や課題を語り合い、育成を目指す資質・能力について議論を重ねる研修を行いました。『コアスクール』事業での取り組みが下地となり、教師一人ひとりが当事者意識を持ってルーブリック作成に携わっていました」

図1 「学び」に関する「動詞」に基づく「学びの評価表（基本形）」

評価項目	知識・技能、思考力・判断力			表現力・説明力
	学び方、学びの仕組み	教科・科目の学習内容	自己、他者・社会	
府中高生として初歩的・基礎的な段階である	学びの仕組みや自分の学び方について、定義・説明できる	学んだ用語・解法・概念について、定義・説明できる	自己や、自己と他者・社会とのかかわりについて、定義・説明できる	<ul style="list-style-type: none"> 簡潔に分かりやすく説明したり、他の言葉で言い換えることができる 分かりやすい具体例や主な例を挙げることができる
府中高生として求められる水準である	学びの仕組みや自分の学び方について、構造的・論理的に説明できる	学んだ用語・解法・概念について、根拠や構造と関連づけて説明できる	自己や、自己と他者・社会とのかかわりについて、異なる意見・視点と関連づけて説明できる	<ul style="list-style-type: none"> 関係や構造を、順序立てて分かりやすく説明できる 根拠を挙げながら、簡潔に意見を述べるができる
水準が高く(深く)発展的である	学びの仕組みや自分の学び方について、検証し、省察できる	学んだ用語・解法・概念について、自ら活用・応用できる	自己や、自己と他者・社会とのかかわりについて、課題発見・解決策を提案し続けることができる	<ul style="list-style-type: none"> 価値や意義を、分かりやすく説明することができる 課題の解決策を提案することができる 自ら新たな課題を設定し、説明することができる

* 学校資料を基に編集部で作成。

「コアスクール」事業を通じて、育成を目指す資質・能力についての理解は深まり、18年度からは、広島県教育委員会「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」の指定を受け、目標実現の

「コアスクール」事業を通じて、育成を目指す資質・能力についての理解は深まり、18年度からは、広島県教育委員会「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」の指定を受け、目標実現の

単元シラバスで、単元ごとに指導と評価を一体化

教師一丸となって具体的な目標として設定した資質・能力の育成に向けて、教科の授業では、19年度から、教科・科目ごとに各学期の学習内容

図2 育成を目指す資質・能力と、ルーブリック (抜粋)

育成を目指す資質・能力		S
知識・技能	知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> 基礎基本となる知識や技能を身につけて課題解決に生かすことができる。 知識を概念化して捉えることで他の場面技能を自在に活用できたりする。
	読解力	<ul style="list-style-type: none"> 必要な情報・データを限られた時間の中や意義を判断・説明できる。 筆者の主張等を簡潔にまとめて、価値やる。
論理的思考力	データ (情報・整理)	<ul style="list-style-type: none"> 適切な分析方法を使いながらデータを分質を見極めるとともに、新たな課題を見える。
	文章 (読み取り)	<ul style="list-style-type: none"> 情報の関連や構造を把握し、筋道立ててえを構築することができる。 分類した情報について、その優位性につとができる。
	関連性・構造的性	<ul style="list-style-type: none"> 逆の立場の意見等を踏まえながら考察しその論拠を基に説明できる。
場面把握力	データ (整理・分析)	<ul style="list-style-type: none"> 場面・周りの状況に応じて、自分の役割適切に対応できるとともに、周りによいとができる。 現状を改善する視点を有し、先のことをきことを把握して行動できる。
	場面・状況・文脈把握 ブレイクスルー	<ul style="list-style-type: none"> 複数の要素を統合して、効果的な方法でげるとともに、説得力のある表現に表す 伝える時に、最も効果的な方法を選択して相手に分かりやすく表現できる。 相手や場面、目的、意図に応じて、ふさでなく臨機応変にパフォーマンスなどの
表現力 (説得力)	文章 図 成果物 実技等	<ul style="list-style-type: none"> 構成力 明解性
	話し方 聞き方	<ul style="list-style-type: none"> 態度 話力
	学びを生かす力	<ul style="list-style-type: none"> 課題発見、課題解決 課題の発見・解決に向け、物事に当事者り組もうとする。 社会における課題について、自己の課題見いだして取り組もうとする。
学ばに向かう力・人間性等	協働	<ul style="list-style-type: none"> 役割理解、参画・貢献 他者や集団とのかかわりの中で、自分の社会に貢献しようとする。 自分の考え方と自分とは異なる考え方をれのよさを見いだしている。
	学びの継続力	<ul style="list-style-type: none"> 振り返り (省察) 展望 学習の仕方や進め方について、検証、省将来の学習や生活に生かそうとする。 具体的な目標や計画を立て、継続的に実

*学校資料を基に編集部で作成。

や育成を目指す資質・能力をまとめた単元シラバス(図3)を活用している。教師間での指導の目線合わせのためだけでなく、生徒が単元を通じて身につけるべき資質・能力を振り返りやすいように、記載内容に留意した。

単元シラバスには、その単元で育成を目指す資質・能力について、どのような状態になれば「S」なのか、「A」なのか、ルーブリックを基に到達段階を明記。単元の最後の授業では、その到達段階に基づいて、生

徒は、「単元振り返りシート」を用いて振り返り、各単元で育成される資質・能力について4段階で自己評価し、その根拠も記述する。教科担当者、生徒が書いた「振り返りシート」を基に、育成したい資質・能力が十分に育まれたかを検証し、その結果を授業改善に生かす。また、シラバスには、授業内で行うパフォーマンス課題や、定期考査の内容、さらには単元での学習内容と他教科や既習事項との関連性までも示した。

生徒は、教科・科目ごとに単元シ

ラバスをファイリングし、どんな資質・能力を身につけるための学習なのか、いつでも確認できる。一方、教師にとっては、指導と評価の両面における指針となっている。

「単元シラバスは、生徒が自身の学びを振り返ることができるように、生徒目線を大事にするとともに、教師にとっては、『どういった資質・能力の育成を目指して授業とテストを行うのか』といった、指導の具体化を求めるフォーマットにしています」(見浦先生)

特別活動や学校行事でも、評価活動を行っている。例えば、文化祭などの主要な学校行事の実施要項には、育成を目指す資質・能力などを明記。事後には、アンケート形式で「どのような点で頑張ったか」「自分はどう変わったか」など、生徒に自己評価させ、面談でそれらの気づきを語らせることを重視している。

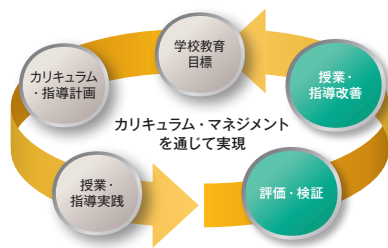
「教科横断型活用問題」で複数教科の統合問題を出題

育成した資質・能力を評価する場の1つが、1・2年生の3学期に実施する「教科横断型活用問題」だ。問題は、複数の教科・科目の知識を基に、考えを論理的に表現する力を測る「教科統合型」と、文章を読み、その内容を踏まえて自分の考えを論述する「問いかかけ型」の2種類で構成され、内容は、各教科会などで検討・吟味している。

「生徒には、論理的思考力や表現力、読解力など、本校が育成を目指す様々な資質・能力を総合的に測定するテストだと説明しています」(藤井先生)

テスト結果は、生徒の資質・能力

高知県立高知丸の内高校



生徒や他教科とともに授業改善を進め、アセスメントで検証、次年度計画に生かす

高知県立高知丸の内高校は、学科の再編や文部科学省からの研究指定を原動力として授業改善を進めてきた。教科を超えた授業観察を行う「ユニット制」や、生徒と教師と一緒に授業を見直す「授業改善検討委員会」などによって実効性のある取り組みを展開。それらの成果や課題をアセスメントで検証し、次年度の教育目標や活動計画を策定している。

成果と課題を明らかにし、次年度の教育活動方針を策定

高知市の中心部に位置する高知県立高知丸の内高校は、2005年度、現在の単位制普通科と学年制音楽科に再編した。多様な進路志望を持つ生徒が入学し、基礎学力に課題が見られるようになったことから、授業改善に着手。17年度、文部科学省「高校生基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」の指定校となったことを好機と捉え、より実効性のある授業改善を行うべく、18年度、「教育活動方針」を打ち立てた。上岡美保校長は、そのねらい

を次のように語る。

「本校の生徒は素直で、言われたことにはきちんと取り組み、自己表現や自ら考えて言動に移すことには、課題が見られました。思考力・判断力・表現力や主体的に学習に取り組む態度などをより効果的に育むため、『学びは楽しい』のローガンの下、『教育活動方針』として本校の取り組みを可視化させました」

同方針を立てる過程では、前年度までの取り組みについて成果と課題を振り返り、それを基に学校教育目標を設定。その達成に向けた授業改善の取り組みを整理して示した。そして、19年度以降も、前年度の成果

と課題を踏まえて当年度の教育活動方針を立てるPDCAサイクルを回す体制を構築した(図1)。

育成を目指す資質・能力を 明文化し、授業改善

授業改善の核となる多様な取り組みを以下、見ていく。

◎身につけさせたい資質・能力の明文化と共有

全教科共通の「丸の内スタンダード」を基に、各教科が「生徒に身につけさせたい力」と、その達成に向けた具体的な取り組みと評価方法を提示。一覧化して、教師・生徒間

高知県立高知丸の内高校

- ◎高知県最初の女子校として開校以降、一時期の男女共学の時期を経て、長らく女子校として女子教育に尽力。2005年度、普通科を単位制に移行し、共学化。17年度、文部科学省「高校生の基礎学力の定着に向けた学習改善のための調査研究事業」指定校。
- ◎設立 1887(明治20)年
- ◎形態 全日制/普通科、音楽科/共学
- ◎生徒数 1学年約160人
- ◎2019年度進路実績(現役のみ) 国公立大は、神戸大、島根大、高知大、高知県立大、高知工科大などに21人が合格。私立大は、明治学院大、京都産業大、近畿大、桃山学院大などに延べ56人が合格。短大、専門学校進学81人。就職9人。
- ◎URL <https://www.kochinet.jp/manuoh/>

で共通認識を持てるようにした(図2)。同校の定期考査では、全教科・科目で、思考力等を問うパフォー

「学校教育デザイン」を描く今と未来



大石由紀
「総合的な探究の時間」担当
おおし・ゆき
教職歴17年。同校に赴任して4年目。理科(生物)。



澤田朝子
さわだ・あさこ
教職歴22年。同校に赴任して7年目。



高野佳香
たかの・よしか
教職歴22年。同校に赴任して8年目。国語科。



門田雅仁
かどた・まさひと
研究主任
教職歴24年。同校に赴任して5年目。地理歴史・公民科。



津野幸司
つの・こうじ
学習指導部長
教職歴34年。同校に赴任して1年目。数学科。



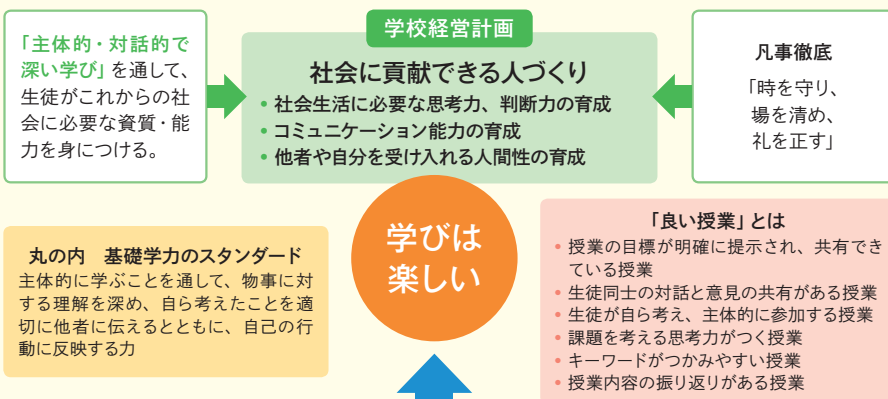
山本由美子
やまもと・ゆみこ
教頭
教職歴33年。同校に赴任して2年目。



上岡美保
かみおか・みほ
校長
教職歴34年。同校に赴任して2年目。

ンス課題を10点以内の配点で出題している。例えば、「コミュニケーション英語Ⅰ」では、パフォーマンス課題

図1 2019年度の教育活動方針(抜粋)



- 丸の内スタンダード(生徒に身につけさせたい力)の達成
 - 各教科における身につけさせたい力の一層の明確化
 - 教職員、生徒、保護者等との共有
- 指導法の共有、徹底
 - 生徒の学習意欲を喚起する
 - 単元の学習目標の下、本時の学習目標の明示、教えると学ぶのバランス、振り返り(生徒、指導者で共有)
 - 1時間の授業中での「考えさせる発問」の工夫→定期考査等での「考えさせる作問」など
- 教科会、教科主任会のさらなる充実
 - 週単位、月単位等での学習到達目標に向けた取り組みの情報共有、協議を行う
 - 「思考力・判断力・表現力」を育成する学習内容について協議を深め、実践する
 - 生徒の変容をより多面的に評価するためのパフォーマンス課題の作成に取り組む
 - 高等学校課「学校支援チーム」との連携を行う(年間21回の学校訪問、国語、数学、英語、地理歴史・公民の研究授業、研究協議) [4]の詳しい内容は、P.15のコラム参照
- 授業外学習の支援
 - 「学び方」「自分にふさわしい学習方法」の習得に向けた指導のあり方についての研究 など

*学校資料を基に編集部で作成。

題1割、記述式問題9割としている。
◎教科会と教科主任会の充実
週1回の教科会では、「生徒に身につけさせたい力」の達成に向けた指導の検討と、思考力・判断力・表現力を問うパフォーマンス課題の研究などを実施。そこでの検討・確定内

容を、月1回の教科主任会で共有し、教科を超えて助言し合う。19年度は、パフォーマンス課題について重点的に研究。教科主任会では実際に出した問題を取り上げ、生徒の解答を踏まえて問題が適切だったかを分析。その結果を職員会議で共有した。

図2 「生徒に身につけさせたい力」国語科の例

令和元年度 「生徒に身につけさせたい力」	令和元年度「具体的取り組み」 (身につけさせたい力をつけるために 日々の授業等で何をやるか)	身につけさせたい力が ついたかどうかを どのように測るか
<ol style="list-style-type: none"> 表現に対する関心を深め、国語の知識や技能を身につけようとする力。 表現内容を的確に理解してまとめ、自分の考えを適切に表現する力。 表現を基に、自ら課題を発見し、自分の考えを適切に表現する力。 	特に「生徒に身につけさせたい力」の①及び②に重点を置いて取り組む。 ①の力を育むため、副教材及び小テストを適切に活用し、特に「漢字・語彙(語句の意味)」「評論に用いられる語句」の知識の定着を図る。 ②の力を育むため、特に社会とつながりのある単元において、生徒自身が得た知識・情報を整理することを目的とした授業を実践する。	定期考査のあり方を見直し、「生徒に身につけさせたい力」の①及び②の力の定着度を測るような問題を作成する。①は、複数回の小テストと同範囲の語彙について出題し、定着度を測る。②はテキストの情報を整理し、120字程度まで表現する問いを出題し、情報を正確に捉え、整理し、的確に表現できているかという点に着目する。

*学校資料を基に編集部で作成。

◎教科混合の授業観察「ユニット制」
教科や世代が異なる教師3人が1組となり、相互に授業観察を行うのが「ユニット制」だ。3人のそれぞれ

指導の振り返りを充実させ、次のステップへつなげる

れが授業者となり、本時の授業目標やねらいなどを「授業観察シート」に記入。それを基に授業を参観し、授業後に3人でよかった点や改善点を話し合う。14年度に始め、現在は前・後期に各1回実施している。生物担当の大石由紀先生は、ユニット制で他教科の授業を見て、自身の指導を見直したと語る。

「言葉の概念に関する現代文の授業では、学んだ言葉を用いた文を作成させ、概念を確認させる活動をしていました。生物は専門用語が多く、その概念をどうすれば正確に生徒に伝えられるかが、当時の私の課題でした。そこで、現代文の授業で行われていた活動を、自分の授業にも取り入れることにしました」

学習指導部長で数学科の津野幸司先生は、教科を超えた授業観察が授業改善に効果的だと指摘する。

「教師全員が授業公開をすることで、学校全体の指導力が高まっています。私は、英語の授業を見て、数学の授業でも思考力や表現力を育むためのペアワークを取り入れました」

◎「授業実践レポート」の作成を通じて自身の授業を振り返る

19年度に始めた「授業実践レポ

ト」は、前・後期に各1回、生徒の变容から教師が自身の授業を振り返る取り組みだ。国語科の高野佳香先生は、思考力や表現力の指導力を高めようと小論文の授業を総括した。

「文章力や語彙力に関する生徒の自己評価は、4月時点で5段階評価の2・5でした。そこで、生徒同士で対話し、意見を共有する活動を取り入れたところ、前期の終わりには3・0に上昇しました。1年間、この活動を実施し、生徒の自己評価の変化を見ていきます」

以上のような学校全体で行ってきた様々な取り組みが、教師の授業改善の意識を高めていると、山本由美子教頭は語る。

「本校には、教師が協働して授業を見直そうとする文化が根づいています。普段から職員室の至るところで、指導や教材について話し合っている先生方の姿を見かけます」

生徒と教師が一緒に授業を見直す「授業改善検討委員会」

授業改善には、生徒の声も取り入れている。毎年12月、管理職・分掌長・教科主任・音楽科科長と、各クラス

の代表生徒が参加する「授業改善検討委員会」を実施。生徒と全教師(校内研修扱い)が同じ公開授業を受け、その後、生徒・教師の混合の班で公開授業や日頃の授業について、前年度に同委員会と教科主任会で決めた「良い授業」(P.13 図1)を基準に、よかった点や改善点を議論し、模造紙にまとめて発表する(写真)。「教科書に載っていない解法を考える時間がもっとほしい」「キーワードが多いと、重要事項が分かりづらくなる。絞り込んでもよいのではないか」など、生徒から率直な意見が出された。18年度、公開授業を担当した研究主任の門田雅仁先生はこう振り返る。

「公開授業では、情報を詰め込みすぎてしまい、最後にまとめる時間を十分に取れませんでした。すると、

生徒から『授業の時間配分をきちんとした方がよい』と指摘され、その反省を次に生かそうと強く思いました。一方で、『授業の目標を最初に示していたので、目指すべきことが分かっていたよかったです』といった意見も出され、うれしい思いもしました。生徒から学ぶことは多く、『よい授業をつくっていくのは、教師と生徒』という意識が両者に根づいています」

生徒・教師・保護者で教育活動をデザインしたい

授業改善の成果はアセスメントによる客観的指標で評価していると、英語科科長の澤田朝子先生は語る。

「D3(*)をなくすことを目標にして授業改善を図ってきた結果、19年度には0人となり、中位層が増加しています。そこで、現在は、D層全体の減少を目標としています」

推薦・AO入試で力を発揮する生徒が増えていると、高野先生は言う。「以前は、志望理由をきちんと書けない、面接でうまく話せないといった生徒が多くなりましたが、自己表現は着実にできるようになっていきます。思考力や表現力は社会で必要と



写真 2019年度の「授業改善検討委員会」には、代表生徒31人が参加。生徒・教師混合の8人が1班となって議論した。各班の発表内容は校内にも掲示し、学校全体で共有している。

* ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「GTZ(学習到達ゾーン)」の評価の1つ。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。

「学校教育デザイン」を描く今と未来

される資質・能力であり、生徒の卒業後の活躍を期待しています」

思考力・判断力・表現力の育成に向けては、19年度、1年次の「総合的な探究の時間」に論理力に関する教材を導入した。澤田先生は、「総合的な探究の時間」と教科の授業をつなげる視点の必要性を語る。

「教科の授業で高めてきた思考力・判断力・表現力を、『総合的な探究の時間』で、より汎用的な力として発揮している生徒の姿を目にします。本校は多様な取り組みを重ねてきましたが、改めて横串を通して捉え直すタイミングに来ているのではないのでしょうか」

同校では、学校行事や部活動、校則などについて、教師・生徒・保護者で協議する「ドリームズ・カム・トゥルー懇話会」を年1回実施している。同懇話会を自校の教育活動全体のデザインを構想する場に活用していきたいと、上岡校長は展望を語る。

「本校は既に多様な取り組みを進めています。点と点を結んで線にし、さらに面とするために、PDCAサイクルを回しながら学校教育デザインを描き続け、その実現を図っていきます」

図3 「学校支援チーム」の年間の活動の流れ

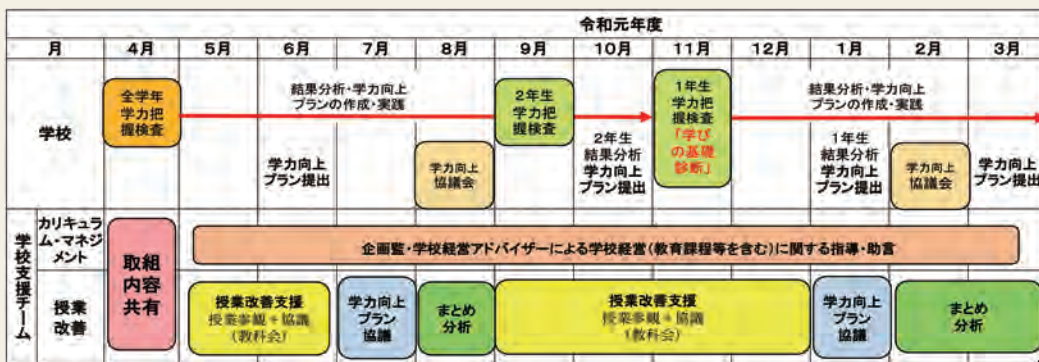
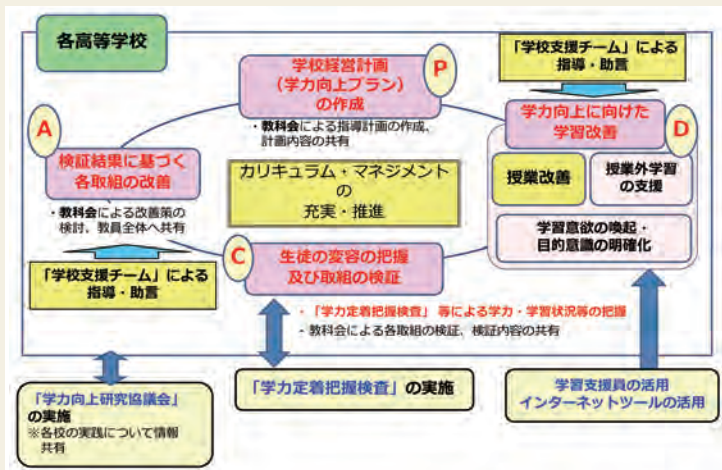


図4 高知県教育委員会が描く授業改善のPDCAサイクル(令和元年度)



「学校支援チーム」が定期的に各校を訪問して助言

高知県教育委員会高等学校課と連携した 授業改善

高知丸の内高校の授業改善には、高知県教育委員会(以下、県教委)の高等学校課もかかわっている。県教委は、2016年3月、「教育等の振興に関する施策の大綱」を策定。さらにそれを踏まえた「第2期高知県教育振興基本計画」を作成し、「高等学校の学力・社会性向上に向けた取組の徹底」を示した。その目標の1つ

に、「基礎学力の定着に向けた『学校支援チーム』の取組の更なる強化」と「将来に向けて目的を持つことができる生徒育成プランの推進」を挙げた。

PDCAサイクルに基づく教育活動を支援しようと、「学校支援チーム」が県内の各校を定期的に訪れて、授業参観と事後研究協議に参加し、指導・助言を行っている(図3)。対象教科は、

18年度は国語・数学・英語とし、19年度はさらに地理歴史・公民を加えた。高知丸の内高校の場合、18年度は「学校支援チーム」が22回訪問し、授業改善について指導・助言をした。各校は、学校経営計画を作成して、目指すべき姿(P)↓それを実現するための取組(実)↓学力の向上や社会性の育成等の評価(C)↓自校の教育活動の見直し(A)を記入。さらに、「高校生のための学びの基礎診断」を活用し、取組みの成果を学びの基礎診断のアセスメントを活用して測り、その結果を分析して教育活動の質を一層高めている(図4)。

* 図3・4ともに、高知県教育委員会提供資料を一部改変して掲載。



「カリマネの壁」を乗り越えるために

「学校教育デザイン」を描き、それを実現する上で鍵となるのが、カリキュラム・マネジメント（以下、カリマネ）だ。しかし、実際にカリマネを推進しようとする、様々な課題が立ちわだかる。そのカリマネをテーマとしてVIEW21編集部が2019年3月に開催したカリキュラム・マネジメントについてのワークショップ（*）の参加者である高校教師6人と講師3人が19年12月に再会。VIEW21編集部の進行で、それぞれの学校におけるカリマネの現状とこれからについて話し合った。

それぞれの形で動き始めた「カリマネ」

2019年3月にカリキュラム・マネジメント（以下、カリマネ）をテーマとして行われたワークショップに参加してからおよそ9か月が経過し、各校のカリマネはどんな進捗状況か、また、どのような課題に直面しているのか、まずは高校教師がそれぞれの現状を語った。

ある教師は、「これまでも校内に授業改善や学校行事の見直しについて話し合う検討委員会は存在したが、それぞれが個別の動きになっていた。しかし、4月に校長へ『カリマネの推進チームをつくり、それを軸に教育活動の見直しを進めたい』と提案したところ、一気に学校全体の動きとしてまとまっていった」と状況を語った。このほかにも、「新学習指導要領を見据えた授業のあり方を、副校長や主幹教諭が中心になって考えるプロジェクトチームが立ち上がった」「分掌リーダーが集まり、学校のグランドデザインを完成した」「学校として育成を目指す資質・能力を言語化した」などの報告があり、多くの高校でカリマネが

着実に推進されていた。また、ある教師は、「本校では『カリマネ』というキーワードでの改革の機運が高まっているとは言えない。だが、少子化によって定員割れが起こっている学校も近隣にある中で、地域や保護者のニーズを把握して、どのような生徒を育てるのかを明確に打ち出し、存在感を示さなければいけないという危機感は、教師の中に確かに募ってきている」と、自校が置かれている環境変化を現場が感じ取っている様子を紹介した。

資質・能力を統合的に発揮する探究学習がカリマネの中核に

資質・能力ベースの学校教育目標の設定が進んだ高校で、教育活動の具体的な改善・見直しの軸になるのは、多くの場合が「総合的な探究の時間」だ。いくつかの高校から、NPOや地域の自治会、地元企業などで活動する外部人材に協力を仰ぎながら、地域の課題をテーマにした探究学習を充実させ、学校教育目標として設定した様々な資質・能力が発揮できる探究学習を展開した例が語られた。また、自校の教師が教科を

進行



株式会社ヘンッセコーポレーション
VIEW21編集部
統括責任者
柏木 崇
かしわぎ・たかし



前・岡山県立林野高校校長
三浦隆志 みうら・たかし

2019年3月まで岡山県立林野高校の校長を務めた。林野高校では、校長として着任した年度からカリキュラム・マネジメントを推進した。



静岡県立御殿場高校 教諭
美那川雄一 みながわ・ゆういち

教職歴15年。同校に赴任して3年目。2学年主任。担当は地理歴史・公民科(世界史)。



関西大学教育推進部 教授
森 朋子 もり・ともこ

専門は、学習研究、学習理論。島根大学教育開発センター長を経て、現職。共編著に『アクティブラーニング型授業としての反転授業』(ナカニシヤ出版)。

講師

*ワークショップの内容は、本誌2019年6月号・特集に掲載。

「学校教育デザイン」を描く今と未来



長崎県立佐世保西高校
教頭
舟越 裕
ふなごし・ひろし



福岡県立小倉商業高校
研修主任、指導教諭
松藤 史紹
まつふじ・ふみあき



徳島県立城北高校
教務課
鈴木 哲也
すずき・てつや



広島県立戸手高校
2学年主任、教育研究所
縄井 教昭
なわい・のりあき



岡山県立総社高校
校長
三谷 昌士
みたに・まさし



大阪府・
大阪市立都島第二工業高校
電気科長
坂本 高英
さかもと・たかひで

高校教師

超えて「社会貢献の経験を語る身近な実践者」としてのエピソードを生徒に語り、生徒とともにこれからの社会で求められる資質・能力について考えるなど、今年度から「総合的

な探究の時間」が教育活動の改善の中核的な役割を担ってきた事例も語られた。

そうした状況について、19年3月のワークショップに講師として参加した関西大学の森朋子教授は、「学力の3要素を踏まえた多様な資質・能力を統合的に発揮する場として、『総合的な探究の時間』を充実させ、さらに各教科の学習と連携させていくことで、生徒は様々な学びのチャンスを生かしながら、自分自身の強みやよさを確認することができるように」と評価した。

カリマネの動きに 負担を感じる教師も……

「総合的な探究の時間」などでの探究学習の充実に価値を見いだす教師が増えている一方で、外部連携などの新しい取り組みに感じる負担もあつた。ある教師からは、「我々教師が生徒の力を低く見積もってしまい、あれこれと手をかけ過ぎることが、負担感の増大につながっている面もあるように思う」と、自らを振り返る声も聞かれた。また、「総合的な探究

の時間」だけでなく、教科学習においても資質・能力の育成を図るために、教師がチームをつくって授業互

観を始めたが、それが教師に負担をかけているという実感も打ち明けられた。

カリマネ進捗報告 福岡県立小倉商業高校「グランドデザイン」*



育成を目指す資質・能力に基づき、教育活動のグランドデザインを作成しました。どんな指導を行うべきかを教師間で話しやすくなりました。(松藤先生)

カリマネ進捗報告 徳島県立城北高校「目指す生徒像」



「高校で身につけたい力」について、生徒、教師、保護者が話し合い、目指す生徒像を言語化しました。今後はグランドデザインの作成に入っていきます。(鈴木先生)

*福岡県立小倉商業高校のグランドデザインの全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

各教師の授業目標を 学校教育目標と一致させる

カリマネの進捗状況は各校によって異なるからこそ、特に熱い議論が交わされたのが、「そもそもカリマネが推進されているとはどのような状態か」という点だ。「自校は、カリマネが推進されている状態にあるのかどうか分からない」と正直に思いを語る教師に、森教授は、「校内の教師がマイクロレベルの授業において学校の目標を共有できているかどうかポイント」と答えた。

「カリマネは、学校教育目標を達成するための手立てです。校内の先

生方で『本校の生徒には、この資質・

能力をしっかりと育もう』と、学校教育目標を共有した上で授業ができれば、生徒も自分の成長を実感できるようなんでしょ。逆に学校教育目標の共有があいまいだと、効果は分散します。生徒はいろいろな先生の授業を受けているからこそ、先生方がご自身の授業における目標を学校教育目標と合致させること、つまり、PDCAのPをそろえることが重要です。そして、マイクロレベルである学校教育目標に向けて生徒を伸ばすことができているか、データを基に評価し、改善のプロセスへとつなげる……それがカリマネが推進さ

カリマネ進捗報告 長崎県立佐世保西高校「指導改善プロジェクト」



1年目は教科主任、2年目は各教科の若手教師を中心に声をかけ、授業改善と「総合的な探究の時間」の充実を2大テーマにカリマネを進めていくプロジェクトチームをつくりました。(舟越先生)

れている状態です(図1)(森教授)

森教授の説明に、長崎県立佐世保西高校の舟越裕教頭が「学校教育目標から下ろされてくる各授業のPは、これからの社会での生き方につながるような、生徒の心に迫る言葉で伝えていきたい」と語るなど、参加した高校教師から共感の声が上がった。さらに、講師として参加した前・岡山県立林野高校校長の三浦隆志先生、静岡県立御殿場高校の美那川雄一先生が、学校全体としてのカリマネの機運の高まりの重要性を指摘した。

「カリマネにおいては、みんなで作っていきましょうというムーブメントの醸成が重要です。PDCAのPを丁寧

にそろえることで、授業や学校行事の精選が進めば、結果的に先生方の負担も軽減されます(三浦先生)」「教師と生徒の思いが一致した時に、その教育は正しかったと言えるのが本来の姿なのではないでしょうか。だから、授業改善のためには、生徒自身に高校でどういう力を身につけたいのかを考えさせることも大切です。いずれ、生徒と教師がともにカリキュラムをつくる時代が来るはずだ(美那川先生)



カリマネの動きを校内全体で共有するための具体的な手立てでも、高校教師から語られた。徳島県立城北高校の鈴木哲也先生は、「授業やテストで工夫している先生の取り組みを周知したり、保護者や卒業生が高校での学びが社会とどうつながっているのかを語り合う場を設け、出てきた意見を教師で共有したりしている」と、自身がかかわっている校内通信の活用を例示。また、広島県立戸手高校の縄井教昭先生は、「地域に対して何ができる学校なのかを、明確な言葉で語れるようになること

「学校教育デザイン」を描く今と未来

も大事だ」と、地域と連携した学校づくりの重要性も指摘した。

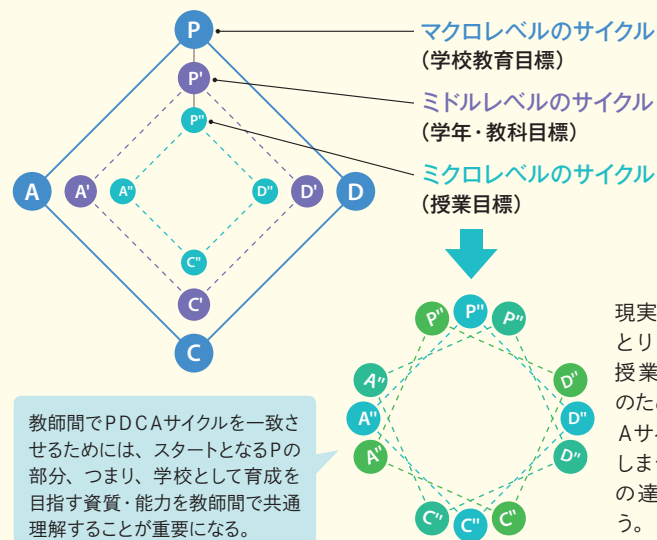
PDCAのAまで回る 評価項目(C)を

カリマネのPDCAサイクルにおける評価のあり方についても議論された。「国公立大学の合格者数が最大の目標となっている現状で、教師も保護者も、点数以外に生徒の成長を語れる材料を持っていない」という高校教師の問題提起に対して、三浦先生は、「だからこそ、生徒にどんな力が身についたのかを自由闊達に話す場を、まずは先生方の中につくってもらいたい」と、教師自身が変わっていくことを求め、それに対して、「生徒の資質・能力面の成長を保護者や地域に発信するなどして、学校が社会を変えていきたい」

「若い先生の中には、資質・能力の育成を大切にして授業改善に臨む人も少なくない。若い教師の力と感性を信じたい」など、高校の力を信じる声が上がった。

岡山県立総社高校の三谷昌士校長の、「評価において大切なのは、客観データであるかどうかだけではなく

図1 カリマネのPDCAサイクル



現実として、生徒一人ひとりが、複数の教師の授業を受けている。そのため、教師間のPDCAサイクルの軸がずれてしまうと、学校教育目標の達成は遠のいてしまう。

く、教育実践の見直しと改善に役立つものかどうかではないか」という指摘に、森教授が、「意図した力が生徒についたかどうかを多面的に測るのが評価であるが、それはPDCAのAが改善するものかどうか重要な」と語り、さらに、「1人の生徒の成長を教師同士でじっくり語

いからと、これまで以上に一生懸命に勉強するようになった」といった声を聞くことがあった。目の前の生徒を大きく変容させる力がカリマネにあることを実感した」と、実践例の紹介があった。

講師と高校教師の対話の中で何度も言及されたのが、「生徒の声を聞

り合えるのは大学にはない高校のよさ。評価は、教師、生徒にとつてコミュニケーションであってほしい」と、願いを語った。また、福岡県立小倉商業高校の松藤史紹先生からは、「暗記型の学習では対応できない、資質・能力を測る問題を定期考査で出すようにしたところ、3年生の保護者の方から、『進路が決まってひと安心していた子どもが、もつと深く学びた

くことの重要性」だ。大阪市立都島第二工業高校の坂本高英先生は、「もともと学習に前向きな生徒だけでなく、高校入学後に意欲的に学び始める生徒もいる。それぞれの生徒に、何を学校に求めているのかを丁寧に聞くことが重要で、学校によっては個々の生徒に応じたきめ細かな教育などがカリマネの中に重要な要素として入ってくることもあるだろう」と、自校らしさを生かした学校づくりへの可能性に言及した。

ある高校教師からは、「カリマネがうまくいっていないとしたら、それは教師目線だけで授業や学校行事のあり方を考えているからではないかと気がついた。自校の生徒の立場で、『今後生きていく未来を考え、どんな教育が求められるのか』を、私たちはもつと語り合わなければいけない」と感想が述べられた。最後に、VIEW21編集部統括責任者の柏木崇が、「本日の議論を、各校でのさらなる対話のきっかけにしたい」と話し、再会の場は幕を閉じた。教師や生徒に加え、保護者など多様なステークホルダーが語り合えば、これからの学校がより鮮明に見えてくるはずだ。

「これからの生徒、これからの教師」

新しい時代に必要となる資質・能力を生徒に育むための「学校教育デザイン」は、一度描けばよいというものではなく、時代や環境の変化を踏まえて描き直すことが求められる。

その度に学校現場は、様々な課題に直面することになるだろう。それでも、学校は、教師は、生徒のために、その歩みを止めることはない。そうした不断の努力を重ねる学校現場へ、3人の教師が、それぞれの立場からエールを送る。

教師が本質を問い、 凡事を徹底させる中で 生徒は志を抱いていく

東京都立西高校 寺島 求もとむら

本質を見抜く力を 日々の授業で養う

私が生徒に育みたいのは、地球規模の課題に挑もうとする志です。そのような志は、本質を見抜く力を礎として確立されるものです。物事の本質を見抜いた時初めて、人は魂を突き動かされ、その感動は大きな壁をも乗り越えようとする志へと昇華します。だからこそ、流行や甘言に振り回されることなく、根拠を持って本質を判断し、納得解を探し続ける態度を、様々な社会課題を抱えたこれからの時代を生きる生徒に育みたいのです。では、私たちの授業は、本質を見抜く力を養う場になっているのでしょうか。

「この問題を見て何を感じる?」

「どうしようと思う?」。数学の授業でそう生徒に問いかけてきました。生徒の答えから発想力が見て取れますし、解にたどり着こうとする過程では、思考力を見ることができます。そして、この問題の本質は何か、出題者はどんな力を測ろうとしているのか、それを考えなさいと話してきました。問題の解き方を教えているだけでは、生徒は「数学は社会で役に立たない」と思うかもしれません。しかし、数学を通して論理的な思考力を身につけ、本質を見抜く力を養っているのだと理解できれば、文系の生徒であっても、数学は社会で役立つものだと考えるようになるでしょう。もちろん、知識の習得も大切ですが、それはやみくもな暗記やドリル学習だけによるものではない

く、教師が精選した事項の理解が起点となって、生徒の中で知識が広がっていくような授業の中でなされるべきです。本質を見抜く力を身につける機会として、授業、学校行事、部活動を大切にしたい。その願いを私は、「凡事徹底」という言葉で繰り返し生徒に伝えてきました。遅刻をしない、挨拶をする、授業に集中する……あたり前のことができない生徒には、教師が「なぜ、それが未来を生きる君たちに大切なのか」を語るべきです。教師自身も凡事徹底する姿を見せることが重要です。

◎教職歴38年。同校に赴任して11年目。3学年主任。数学科。東京都教育委員会指定の進学指導重点校である東京都立八王子東高校において、進路指導主任などを歴任。2018年4月から再任用教員。19年度をもって教壇を降りる。



「学校教育デザイン」を描く今と未来

生徒が語る 寺島先生からの「未来への学び」



寺島先生は、授業開始5分前には必ず教室に来て板書を始めます。授業が始まったらすぐに僕らが集中できるように準備してくれているのです。そして、定期検査や校内模試の結果は、どの先生よりも早く、しかも度数分布までつけて返却してくれます。先生は先生がやるべきことを通して、「凡事徹底とはこういうことなんだよ」と、僕たちに教えてくれている気がします。(3年生 横田陸さん)



「言われたことをやるだけではなく、すべきことは何かを自分で考えなさい」と寺島先生はよくおっしゃいます。依然として、出る杭は打たれる社会だからこそ、高校時代から、自分が何かをしようという意志を持ち続けなければいけないと思います。授業や部活動などで、自分の頭と手を使う中で、自らのアイデンティティを確立していくことも、僕ら高校生にとっての凡事徹底だと思います。(3年生 大山真由さん)



広い視野で相手を見て、その人のためになることを考えられるのが寺島先生です。今後、AIが発達しても、人とコミュニケーションを取ることは人間にしかできないはず。だからこそ、高校時代に身につけなければいけないのは、自分自身のことを理解した上で、周囲の人を生かしていく力だと思います。AIにはできない人間の役割が果たせる大人、寺島先生のような大人になりたいです。(3年生 熊井萌実さん)



どんなに高い目標を打ち明けても絶対に笑わず、「君なら、できるんじゃないの」と本気で言ってくれるのが寺島先生です。大人の中には、自分が間違っている子どもには謝らない人がいますが、寺島先生は自分が勘違いしていた時などはすぐに謝るし、自分から率先して生徒に挨拶もしてくれます。生徒に求めることを自分が徹底しているのです。信じられる人は、こういう人なのだと思います。(3年生 古川幸佳さん)



東京都立西高校

◎昭和12年に創立された府立第十中学校を母体とする。教育理念は「文武二道」「自主・自律」。国際社会で活躍できる人材の育成を目指す。東京都教育委員会指定の進学指導重点校。

◎設立 1937 (昭和12)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約320人

◎2019年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、東京医科歯科大、東京工業大、東京大、一橋大、京都大、大阪大などに107人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、早稲田大などに延べ394人が合格。

◎URL <http://www.nishi-h.metro.tokyo.jp/>

38年間の教師生活を通して、私は、定期検査の答案を調査後の最初の授業で必ず返却してきました。生徒の学びの意欲が高まっている「旬」を逃したくないという私なりの矜持きんぎょがあり、その実現のために時間管理を工夫するなどしてきました。生徒も教師も求められることは同じです。教師は誰もが、生徒のことを大切に思っています。ただ、寂しいことですが、生徒の行く末を最後まで見届けることはできません。だからこそ私は、毎日の授業で未来の生徒とつながろうとしました。授業の延長線上に生徒の未来があるからです。日々の授業と生徒の未来の間に橋を架ける職人、それが教師なのです。

変化を楽しみむマインドを持ち、 学校を超えて生徒も教師もつなげたい

福岡県立福岡高校 深江一美

外に出て人間性を広げ、
教師としての魅力を高める

福岡県の公立高校で教師を務める私は、2019年度の1年間、研修として北海道の私立札幌新陽高校に勤務しています。同校では、授業や担任を持たず、会議や学校行事等に参加したり、視察目的の来校者と教育課題について意見交換をしたりしています。加えて、道内の高校や教育委員会、企業等の視察もしています。

20年度に福岡に戻って取り組もうと考えているのは、地域や学校を超えて教師や生徒をつなげることです。外に出ることで自分や所属組織を客観視でき、本質や価値を見直せるとよく言われますが、私はそれ自身をもって経験しました。学内外で出会った人々は、私の出身大学や勤

務校を気にも留めずに接してくれました。先入観がない代わりに、どんな教育活動をしてきたのか、授業で重視することは何かといった実践や教育観を聞かれ、それで私という教師が判断されました。そうした中で、私の軸は大学院に進学してまで追完した文学にあり、人生を豊かにする文学の面白さを生徒に伝えたいという、私が教師を志した原点を改めて見つめ直すことができました。

また、1つの組織に長くいると、自分の同じ面しか出せなくなるものです。教師の場合、教室で生徒に見せる面ばかりを磨いてしまうことなどがその一例です。それでは人間的な広がりがなく、面白みのない教師になってしまいます。教師はもつと外に出るべきだと思います。

SNSを利用すれば、遠隔地の人との連絡も容易ですし、学校を通じ

た出会いであれば安心・安全です。様々な学びを生み出す他者とのつながりを、教師にも生徒にも広めたいです。私自身も他者とのつながりを広げていきたいと思っています。

道内の様々な学校を見る中で、理想の学校は自然とできていくのではなく、自分たちで模索し、創るしかないといった覚悟もできました。

札幌新陽高校は、民間企業から転身した荒井優校長が、大胆な改革で廃校寸前から立て直し、生徒主体の学びを実現している学校として全国から注目されています。特に、探究コースでは、生徒自身が自分に必要なことを考えて学び、問題解決型学習に取り組んでいます。校外のビジネスコンテスト等では上位に入りますし、他校からは「発想力や提案力がある」と評価されます。そうした学びが、今後一層求められるのだと

◎教職歴15年。国語科 探究学習担当。同校赴任7年目となる2019年度の1年間、札幌新陽高校で長期派遣研修中。

◎福岡県立福岡高校/全日制・普通科・共学。1学年約400人/東京大や京都大など、国公立大に例年200人余りが合格する進学校。

実感します。一方で、自分には知識が乏しく、考えを深め切れていないと悩んでいる生徒もいます。そうした生徒を見ると、自律的な学びを支えるためには、知識を体系的に与える場も必要ではないかと考えます。どうすれば、生徒のよりよい成長に寄与できるのか。教師自身が考えて実践することでしか、最適解は得られないのだと分かりました。

今後も、社会は加速度的に変化すると言われています。不安をあおる風潮も見られますが、生活が便利になったり、新たな職業に挑戦できたりといった、様々な可能性への期



「学校教育デザイン」を描く今と未来



札幌新陽高校では、2019年度に職員室を改装。用途に応じた3つのゾーンに分け、教師・生徒・来校者が交流しやすい場所にした。

越境した学びをともにして

「出会いと原体験」を積み重ねていく場所、それが学校だと私は考えています。自身の知的好奇心を発見し、自分なりに深め、価値観や将来像を見いだしていく。学校の役割は、生徒をその入り口に導くことです。だからこそ、学校を地域や企業等に開放し、多様な異分子が行き交うようになっています。福岡県教育委員会から深江先生の派遣を打診された際にすぐに了承したのも、北海道とは全く異なる地域の公立高校の教師が来たら、本校の教師も生徒もこれまでとは違う学びが得られると考えたからです。私自身は、上場企業に就職して、自分なりに努力し、複数の企業で要職を務めるまでになりました。しかし、それが成功だという価値観は、東日本大震災の復興事業にかかわる過程で一変しました。地域に根づいて生きてきた人々が悲惨な現状を受け入れ、力強く前を向いて歩いてい

異分子が多いからこそ学校は活性化する
北海道・私立札幌新陽高校 校長 荒井 優ゆたか

待も高まっています。変化すると分かっていながら、それを前向きに捉えたいですし、生徒にはどんな状況も楽しめる大人になってほしいと考えています。そして、生徒がそう

したマインドを持てるよう、私自身、どのような教育が求められても、生徒と一緒に自分も成長できるチャンスなのだと思え、変化を楽しむ教師であり続けたいと思います。

る姿を見て、生きる力とは何かを深く考えさせられました。そんな折に、祖父が創立した本校の立て直しを父から依頼されたのです。私の異なる環境での出会いと原体験は、今の学校づくりに生きています。

深江先生が北海道で学んだ成果が問われるのは、福岡に帰ってからでしょう。それは、ともに学んだ本校の教師にとっても同じことであり、両者の今後に期待しています。

◎民間企業を経て、2011年7月、公益財団法人東日本大震災復興支援財団専務理事に就任し、復興支援に尽力。福島県立ふたば未来学園中学校・高校の設立にも参画。16年2月、札幌新陽高校の校長に就任。

◎北海道・私立札幌新陽高校／全日制・普通科・共学・1学年約400人／「本気で挑戦する人の母校」をスローガンに、学校改革を推進。長年続いた生徒減少を解消し、大学進学率は6割に増加した。2018年度、探究コースを設置。

教師と生徒が時にぶつかり合い 未来をつくる場所——それが「高校」

山梨県立吉田高校

高保裕樹たかほゆうき

学校教育目標が教師、生徒、 保護者の共通言語になった

私たちが育てたいのは、人生を通して学び続ける人です。「学びは授業中だけ」と考えるのではなく、日常生活のすべてが学びだという意識を生徒に育みかけた私は、校長として赴任してすぐ、高校3年間を通じて身につけてほしい力を、学校教育目標「吉田高校グレンジューション・ポリシー（吉高GP*）」として明文化し、授業はもちろん、学校行事や部活動など、すべての教育活動における共通の目標としました。

かもしれない様々な問題を、吉高GPを使ってどのように解決するかを考え、話し合うワークショップを実施しました。また、保護者から「社会や仕事で必要とされる力について、吉高GPと結びつけながら子どもと話をしようになった」といった声を耳にすることもよくあります。教師、生徒、保護者にとって、吉高GPは達成すること以上に、今後必要になる資質・能力を語り合うためのきっかけとして価値を持っているのです。

変えた方がよいと思う」と提案しました。すると生徒たちは、「その方が、より今の時代に合っているのでは」「みんなが納得できる言葉になっているか」と私たち教師の目の前で話し合い、最終的に「現状のままがよい」という結論にたどり着きました。議論を満喫した様子の生徒たちを見て、私は、生徒が自分の力で学校をよりよく変えようとしていることに、大きな感動を覚えました。

「絶対解」が存在しない課題が山積する時代になった今、これからの学校は、教師が教える場から、教師と生徒がともに学び、成長する場になるでしょう。生徒は、教師の言葉に疑問を感じた時は、それをきちんと教師に伝え、教師は、ともに学ぶ者として生徒の言葉に耳を傾けた上で、自分の考えを説明する。生徒と知的な議論をすることで、教師は生徒にとって、「あの人のようになりたい」と、変化の激しい時代におけるロールモデルになるのです。

*「自己肯定力」「傾聴力」などの8つの資質・能力。本誌2017年6月号P.10～13参照。

◎教職歴35年。同校に赴任して3年目。学校長。初任で吉田高校勤務後、教育庁社会教育課などを経て、現職。生徒の自己肯定感を高める多面的な教育目標として「吉高GP」を設定。教育活動全般の改善を進め、「学校教育デザイン」推進のモデルとして、全国から注目を集めた。



「学校教育デザイン」を描く今と未来

教師が語る「高保校長から得たもの」



教務主任 **東 一孝**

教育には不易と流行があります。生徒に向き合う教育者としてのあり方は変わらなくても、変化する社会の中で学校の果たすべき機能や役割を見直し、常にバージョンアップをしていく感度と覚悟が、私たち教師には求められているように思います。本校は、高保校長が掲げた「吉高GP」の下、学校行事の精選や授業の改善を絶え間なく続けていますが、「吉高GP」という軸を得たことで、教師一人ひとりが、時代の動きを踏まえたこれからの教育を考えることができるようになったのです。



1学年主任 **在原 綱樹**

高保校長は、壁にぶつかった経験も含めて、自分の生き様を赤裸々に我々教師に対して、そして時には生徒に対しても語ります。それは、「こうすればうまくいく」という人生の模範解答ではなく、生き方を一緒に考えようという問いかけのように感じます。そこに集う人たちがそれぞれのよさを引き出し、認め合いながら、集団の力にしていく……教師にとっても生徒にとっても、学校はそんな場であるべきだと、高保校長との3年間は私に教えてくれたように思います。



1学年担任 **川崎はるな**

高保校長はアイデア豊かで、発想力に富んだ先生です。しかし、私たちに自分の考えを押しつけることはせず、「こういう考えもあるんだよね」と、私たちが自分の力で気づきを得るような言葉を与え、それぞれの成長を促します。高いアンテナを持って様々な情報を収集し、そこから確固たるご自身の考えをつくりながらも、私たち若手にも職員室で気さくに話しかけ、若手の考えを丁寧に聞いていく高保校長から、これからのリーダー、これからの教師として必要なあり方を学んだように思います。



山梨県立吉田高校

◎校訓は「百折不撓」「純剛」。新入生を対象にした校歌・応援歌指導、富士登山強歩大会などの伝統行事を持つ。1、2年次の「総合的な探究の時間」の中に「富士山学」を設置し、富士山の観光、防災、産業、自然など、多角的な視点からの探究学習に取り組む。

◎設立 1937（昭和12）年

◎形態 全日制／普通科・理数科／共学

◎生徒数 1学年約260人

◎2019年度入試合格実績（現役のみ）

国公立大は、東北大、筑波大、東京大、名古屋大、大阪大などに99人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、明治大、早稲田大などに延べ513人が合格。

◎URL <http://www.yoshidan.kai.ed.jp>

になるように思います。絶対解が存在しない時代だからこそ、うまくいかなかった経験の中にも学びがあったことを、先生方に、そして生徒にも話してあげてほしいのです。

「こうしなさい」と指示するのはなく、「私はこう思うのだけれど、あなたは どう思う？」「一緒に挑戦してみない？」と問いかけてもらった方が、生徒も教師も成長するはず。納得できなければ、話し合えばよいのです。それは、私たちが未来を生きる生徒に必要な力として求めていることなのです。高校は、生徒と教師にとって、時に知的にぶつかり合いながら、未来をつくる場所であってほしいと願っています。



生徒は、名簿順に4人1組の10グループに分かれて、それぞれ席に着いた。諏訪先生は、本時に行う調べ学習のテーマとして、「りんごの栄養成分」「りんごの生産地」「りんごを使った料理」など、10項目を提示。各グループの代表者が前に出てきてくじを引き、自分たちが調べるテーマを決めていった。

●2時間続きで行われる1年生の「家庭基礎」で、単元「調理の基礎」の全20時間のうちの19・20時間目。1時間目は、グループでりんごの特性について調べ、2時間目は、りんごの皮むきと廃棄率計算の実験を行った。(P.29に単元の指導計画を掲載)

グループワークや実習・実験を通して、 社会で生きていく上で必要な 表現力や協働性などを育む

諏訪先生のアクティブ・ラーニング

経験が表現力を育むと考える、 生徒主体の活動を多く設定

青森県立八戸西高校ほちのへの諏訪節子先生は、授業を通じて生徒の表現力や協働性を高めたいという思いから、以前より、生徒主体の活動を多く取り入れた授業づくりをしてきた。

「私は、経験が表現力も育むと考えています。教師から一方的に教えられる覚えたことは、時



青森県立八戸西高校ほちのへ
諏訪節子 すわ・せつこ

教職歴34年。同校に赴任して5年目。図書部副主任。家庭科担当。調理実習を生徒一人ひとりが行うことなどを通じて、実生活に役立つことを重視した授業を展開する。

青森県立八戸西高校

◎校訓は、「自啓自発」。1975年の創立当初から「文武両道」を掲げ、勉学と部活動の双方に力を注いでいる。「ライフ・ナビ・タイム」と名づけた「総合的な探究の時間」では、生徒に自己のあり方・生き方、進路について考えさせる活動に取り組む。

◎設立 1975(昭和50)年

◎形態 全日制/普通科・スポーツ科学科/共学

◎生徒数 1学年約200人

◎2019年度進路実績(現役のみ)

国公立大は、北海道教育大、弘前大、岩手大、秋田大、青森公立大などに27人が合格。私立大は、東洋大、法政大などに延べ94人が合格。短大、専門学校進学64人。就職10人。

◎URL <http://www.hachinohenishi-h.asn.ed.jp/>

10:55 グループごとに発表



調べ学習の15分間が過ぎると、テーマについて調べたことを書き込んだホワイトボードシートを教室の壁や黒板に貼り、各グループの代表者が発表した。諏訪先生は、それらの発表について補足説明をするとともに、優れた視点での発表には、「気づいた点がよいですね」などと、評価するコメントをした。

10:40 スマートフォンを使って調べ学習



各グループとも、調べる役や書記役などを分担し、くじ引きで決まったテーマについて、スマートフォンを使って調べ、分かったことをホワイトボードシートに書き込んでいった。諏訪先生は、各グループを回りながら、「この用語は難しいから、説明の仕方を工夫しないとみんなに理解してもらえないかもよ」などと声をかけて、生徒に気づきを促した。

思考の活性化・深化への配慮

学びの質を高めるために、ノートへの書き込みを重視

諏訪先生は、講義形式の授業でも、後半にペアワークの時間を設けて、学習内容について生徒同士で質問や意見を出し合わせ、教師による一方的な授業にならないよう留意している。

本時の学習内容は、1時間目は「りんごの様々な特徴」、2時間目は「りんごの皮のむき方と廃棄率」だった。今回、1時間目は講義形式ではなく、生徒を4人1組の10グループに分け、「りんごの栄養成分」や「りんごの生産地」

間が経てば、生徒は忘れてしまいます。一方、自ら頭を働かせ、体を動かして経験したことは、記憶として定着しやすく、それを文章や口頭でアウトプットする際にも、生徒独自の視点で表現することが可能になります」

さらに、諏訪先生はここ数年、生徒の人とわかる力の低下を感じており、周囲と協力しながら課題に取り組み経験を積ませるために、生徒同士の協働活動を積極的に取り入れている。

2時間連続で行われる「家庭基礎」では、1学期は「栄養学」や「男女共同参画社会」などを講義形式で指導し、2学期からの「調理の基礎」では、食品の特徴を始めたとした栄養学、消費者としての商品選択、食品や器具の衛生的な扱い方などを指導した後、実験・実習を行う。

などのテーマについて、各グループがスマートフォン（*）を使って調べ、要点をホワイトボードシートにまとめ、発表する活動を行った。そのねらいは、必要な情報を選択する力や、他者に分かりやすく伝える力、メンバーと協力しながら物事を進める力を育むことだ。そして、グループワークでは、諏訪先生は調べ方やまとめ方、発表の仕方について、あえて具体的な指導をしなかった。

「教師からの指示がなければ、生徒はまとめ方や発表の仕方を、自分たちで相談しながら決めることになります。同じテーマでも、調べる視点や重要だと感じるポイントは、生徒によって異なります。協働的な活動をする中で、生徒にももの見方や考え方は多様であることを理解させたいと思っています」

諏訪先生は、活動が停滞しないよう、様子を見ながら、適宜、まとめ方や発表の仕方のヒントを与えていった。

また、諏訪先生は、学習内容や気づいたこと、考えたことなどを、ノートに書き込ませている。自分の頭で考えてまとめることで、学びの質が高まり、表現力も身につくと考えるからだ。授業後にノートは提出させ、評価対象の1つにしている。ノートの評価の比率をやや高めにすることで、生徒のノート提出意欲を維持している。

定期考査では、授業を通じてどれだけ深い思考ができ、それを自分の言葉で表現できるようになったのかを見るために、配点の約4分の1

* スマートフォン等は、調べ学習の時間以外には机の上に置き、操作しないルールとしている。

12:10 廃棄率を計算



自分がむいたりんごの皮と芯の重さを量り、廃棄率を算出してプリント（図）に記入した。事前に説明のあったりんごの標準廃棄率とされる15%以下で皮むきをするのが目標だ。計算を終えたら各自で後片づけをし、本時の学習内容や気づきをノートにまとめた。最後に、自分がむいたりんごを試食して、授業は終わった。

11:30 りんごの皮むき



諏訪先生がりんごの皮のむき方を実演しながら説明した後、生徒は調理室に移動し、包丁で皮むきを始めた。包丁の使い方のコツをつかんだ生徒が、上手に皮をむけていない生徒に教えるなど、学び合う様子が見られた。諏訪先生は、机間巡視しながら、1人で悪戦苦闘していた生徒に、「周りの人がどうやっているのかを見て、参考にしてください」と声をかけた。

令和元年度「家庭基礎」第3回 調理実験
「りんごの廃棄率を知る」 廃棄率の計測方法とその実験
高松市立八戸高等学校
1年 組 名 姓

【課題】
りんごの廃棄率とその計測方法を調べる。
→ 廃棄率について理解する。
皮むき方（包丁）を習得する。
【準備】
包丁（1つ）、りんご（1個）を用意する。
1. 皮むき方の動画を観て、手順を確認する。→「実験前」
2. 「りんご」の重量を計る。皮むき終わった後、皮むき部分の重量を計る。→「実験中」
3. 皮むき部分の重量を計算する。→「実験後」

計算式の求め方 皮むき部分（廃棄分）/全体重×100＝廃棄率（%）
【C→】 ÷ 【A→】 ×100＝（%）
※計算結果は1桁までで四捨五入してください。

りんごの廃棄率の単位、包丁のむき方、廃棄のメモ

図 調理実験は、生徒各自で行い、結果をプリントに書き込み、ノートに貼って提出する。
*諏訪先生提供資料をそのまま掲載。

場づくりへの配慮

1人で調理するからこそ、協働性を育む場が生まれる

諏訪先生は、調理実習や調理実験には、グループではなく、1人で取り組ませることを基本としている。調理や実験の手順などが分からなかったら、周囲の生徒に聞かざるを得ない状況に身を置かせることで、生徒同士で問題を解決する、協働性の育成につながると考えている。さらに、実習中には、生徒に「分からないことは、周りの人に質問しよう」「ほかの人がどう

を記述式問題としてしている。そして、解答用紙の裏面には、授業で感じたことや、家庭科での学習を通じて自分の生活意識がどのように変化してきたのかなどを書かせることで、学習を振り返り、学んだことを日常生活に結びつける意識を持たせるようにしている。

成果と課題

授業で学んだことを実生活で生かすように促す

諏訪先生が目指すのは、家庭科の授業を通じて、生徒に社会で生きていく上で必要な資質・能力を育むことだ。表現力や協働性の育成を重視しているのも、そのためである。

「大切なのは、授業で学んだことを実生活で生かすことです。そうする中で、『調理実習で学んだことをこんなふうに応用すれば、もっとおいしい料理ができる』といった気づきがあり、さらに深い学びにつながるでしょう。生徒には、『今日の授業で学んだことは、家庭でもやってみましょう』と常に伝えていきます」

授業参観後に行った保護者へのアンケートでは、「子どもが、家庭科の授業のことをいつも家で話してくれ、親子で料理について話す機会が増えました」といったコメントがあった。それはまさに、生徒が家庭科での学びを生活に生かそうとしていることを示すものだった。

「今後の課題は、電子黒板やタブレット端末といったICTを用いた授業の実施です。ICTを活用して生徒同士の協働的な活動を効果的に行えば、表現力や協働性をさらに高めることが可能になるのではないかと考えています」

単元の指導計画

【教科・科目】家庭・家庭基礎 【分野・単元】食生活と自立 調理の基礎（調理実習・調理実験） 【テーマ・作品】りんごを用いた廃棄率計算
 【設定時数】全20時間の中の19・20時間目 【単元目標】①りんごの栄養成分とその特徴を知る。②廃棄率について理解する。③皮のむき方（技術）を習得する。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	調理実習1 「厚焼き卵」	<ul style="list-style-type: none"> 食品の安全と衛生について理解している。 食品の特徴について理解している。 加熱調理において火加減の調節ができる。 【知識、技能、主体性、協働性】	①〈全体説明〉 本時の学習内容の説明を聞き、師範調理を見学する。 ②〈調理〉（完全1人調理：調理台〔蛇口2栓、ガスコンロ2口〕に2人配置） ・1人2個の卵を使って「厚焼き卵」を作る（調味料：砂糖、塩、しょうゆ）。 ・盛りつけ・配膳する（できあがった厚焼き卵を切り、皿に盛りつける）。 ・作り方が分からない場合は、クラスメートに確認する。 ③〈評価〉 ・配膳された厚焼き卵の評価（調理過程、加熱状態、でき栄え等）。（評価者：教師） ④〈振り返り〉 ・個人で試食した後、振り返り事項をプリント（ノートに貼付済み）に記入し、提出する。	【主体的な学び】 ・自力で調理することにより、調理過程の組み立てや味加減、火加減の調節をできるようにする。 ・自力で調理することにより、食品を安全かつ衛生的に扱う意識を高める。 ・自力で調理することにより、日常の食生活を振り返り、食生活を改善・向上させる意欲を育てる。 【対話的な学び】 ・師範調理を見ることにより、対話しながら調理過程の確認をできるようにする。 ・食品の安全及び衛生的に扱う意識を養うことができるよう、卵の生産から流通、食品衛生（食中毒）の観点からも説明する。 【深い学び】 ・調理過程で失敗した経験から原因を考えさせ、次回への成功への意欲を養う。 ・調理の成功体験により、家庭でも実践してみるよう促す。 ・生徒自身の食生活を見直し、家族の食事にも配慮できる行動力を身につけるよう促す。	<ul style="list-style-type: none"> 盛りつけ、配膳された「厚焼き卵」を生徒の目の前で採点・評価する。 プリントに記入した実習の反省（振り返り）事項は、実習後回収し、授業への関心・意欲・態度として評価する。
2					
19	調理実験3 「りんごを用いた廃棄率計算」	<ul style="list-style-type: none"> りんごの主な品種や栄養的特徴を理解している。 食品の廃棄率を理解している。 りんごの皮をむくことができる。 【知識、技能、主体性、協働性】	①〈全体説明〉 本時の学習内容の説明を聞く。 ②〈りんご・食品の廃棄率について〉 ・りんご・廃棄率についての調べ学習をする。 ・りんご・廃棄率について調べたことを発表する。 ③〈りんごの皮むき（廃棄率の確認）〉 ・1人で1個のりんごの皮をむき、廃棄率を計算する。 ・包丁の使い方が分からない場合はクラスメートに確認する。 ④〈評価・振り返り〉 ・個人で試食した後、振り返り事項をプリント（ノートに貼付済み）に記入し、提出する。	【主体的な学び】 ・自力で調理することにより、調理過程の組み立てができるようにする。 ・自力で調理することにより、食品を安全かつ衛生的に扱う意識を高める。 ・自力で調理することにより、日常の食生活を振り返り、食生活を改善・向上させる意欲を育てる。 【対話的な学び】 ・師範調理を見ることにより、対話しながら調理過程の確認をできるようにする。 ・食品の廃棄率を理解することにより、食品を無駄なく使う意識や食品ロスの概念を養うよう促す。 【深い学び】 ・調理過程で失敗した経験から原因を考えさせ、次回への成功への意欲を養う。 ・調理の成功体験により、家庭でも実践してみるよう促す。 ・生徒自身の食生活を見直し、家族の食事にも配慮できる行動力を身につけるよう促す。	<ul style="list-style-type: none"> 標準廃棄率以下で皮をむけたかどうかを評価する。 ノート及びプリントに記入した学習の内容と実験後の反省（振り返り）事項は、実験後回収し、授業への関心・意欲・態度として評価する。
20					

*諏訪先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全20時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

生徒の声



赤坂 葵さん 諏訪先生の授業で行われる調理実習では、先生が調理法を一通り実演・説明してくだ

さいますが、実際の調理は自分1人ですることが求められます。分からないことは周りや先生に聞きながら進めますが、自分1人で最後まで終えなければならぬので、考える力がつきます。

今日のグループワークでは、私たちのグループは「りんごの加工品」について調べました。みんなの前で発表したのは、私です。ホワイトボードシートに書いたことをただ読み上げるのではなく、みんなが聞き取りやすいようにポイントを絞って話すように心がけました。私たちよりも上手にまとめていくグループの発表を聞く、「もっと工夫できた点があった」と気づき、勉強になりました。



藤田 美紀さん 諏訪先生の授業で楽しいと思うのは、ノートにまとめることです。先生の授業から学ぶことは多く、感想や自分の考えを書くことも求められるので、それらを整理してノートに書くのは大変です。でも、書きながら理解を深められますし、きちんとまとめれば、諏訪先生が評価の印であるはんこを押して返してくれるので、とても励みになります。

今日のグループワークでは、私たちのグループは、「スターカット」という、りんごの栄養素をあまり損なわない切り方について調べました。私は書記役を務めました。スマートフォンで調べる役、調べたことを整理する役、書記をする役を自然と分担できたので、スムーズに取り組むことができました。みんなで協力し合うことの大切さも学びました。

10:40 活動内容を確認



生徒は、1分間、マインドフルネスで心を整えた後、以前紙にまとめた「自分の強み」を確認。山本先生が「強みの異なる人が集まってパワーが生まれる。みんなのよさを出し合いながら目標に向かおう」と伝えた。そして、授業後に記入する自己評価シート「学びのグラフ」を配布し、時間管理・協働・行動の3つを意識して活動するよう呼びかけた。

授業 ハイライト

●中学1年生の英語・理科の合教科による2時間統
きの授業。英語や理科の知識の必要性を認識できる
よう設定された問題解決型学習を1年間行う。本時
では、環境問題への理解を深めた後、調べ学習など
を行った。(P.33に年間シラバスを掲載)

主体的・対話的で
深い学びへ

実践 アクティブ・ラーニング

英語・理科の合教科

教科の知見を生かした 問題解決型学習で、 自律的な学習者を育てる

山本先生のアクティブ・ラーニング

生徒の内から湧き出る意欲を 大切にしたい「教えない授業」

2019年度に東京都・私立新渡戸文化学園
に赴任した山本崇雄先生は、担当する英語の授
業で、生徒の学びの意欲の喚起を大切にしたい「教
えない授業」を行っている。同学園は、平岩国
泰理事長の下、STEAM教育(*1)など、
学校改革を推進中で、中学校・高校での新しい



東京都・私立新渡戸文化学園 山本崇雄 やまもと・たかお

教職歴25年。同校に赴任して1年目。
東京都立両国高校、同武蔵高校に勤務後、
2019年度から同校に赴任。
講演会や出前授業、
執筆活動を精力的に行っている。

東京都・私立新渡戸文化学園

◎こども園、小・中学校、高校、アフタース
クール、短期大学を擁する総合学園。1927年、
経済学者・森本厚吉理事長の下、女子文化高
等学院として開校。翌年、新渡戸稲造を初代
校長として迎える。2008年に法人名を東京
文化学園から新渡戸文化学園に変更した。小
中・高で自律的学習者の育成を目指し、PBL
型授業を取り入れたカリキュラム編成を行う
などの教育改革を行っている。中学校では、
2020年度から、5教科が連携した5時間連
続のクロスカリキュラムを実施予定。

◎設立 1927(昭和2)年

◎生徒数 中学校1学年1クラス、高校1学年
3クラス

◎形態 全日制/普通科/共学(高校)

◎URL <https://www.nitobebunka.ac.jp/>

*1 STEAMは、Science、Technology、Engineering、Art、Mathematicsの頭文字で、STEAM教育は、科学・技術・工学・芸術・数学に重点を置いた教育、人材育成のこと。

10:58 最先端のリサイクル技術を紹介



続いて、理科の山藤旅間先生が、「魚がプラスチックを食べたら、どうなると思う？」と問いかけた。プラスチックごみは、腸で吸収できず、魚の体内に残ることを説明し、リサイクルの必要性への意識を高めた。そして、動画を流し、古着をリサイクルしてジェット燃料にする技術など、最先端のリサイクル技術の研究を紹介した。

10:51 英文資料からプラスチックごみ問題を考察



山本先生は、英文の資料を示し、「日本ではあまり見かけないデータですが、日本が世界1位です。何のグラフかな？」と発問。生徒が議論する中で、山本先生は英単語の成り立ちから文意を類推するためのヒントを与えた。プラスチックごみの国ごとの輸出量という正解にたどり着いた後、海外の資料やデータも調べれば、見えてくるものが増えることを伝えた。

英語教育と問題解決型学習を実現させるため、山本先生を招いた。

山本先生が現在の授業スタイルを確立したきっかけの1つは、11年にイギリス・ケンブリッジ大学で行われた英語教授法の研修会に参加したことだった。

「その頃に始めたオールイングリッシュの授業について、研修会参加者から『教えすぎ』と指摘されました。生徒は活発に活動し、英語で意思疎通が可能になることに達成感を得ているように見えました。今思えば、生徒は私の指導に沿って英語を使っていただけでした。4技能は身についたとしても、思考力や自律的に学習に取り組み態度の育成はできていませんでした」

山本先生の「教えない授業」では、中学1年生の英語の場合、アルファベットを習得し終える前に、生徒はインターネット電話でアジアの中学生と英語でやりとりを始める。知っている英単語を活用しながら何とか会話をすることで、生徒は自分の英語が通じた喜びを感じ、もっと英語で話したいと思うようになる。

「私が育成を目指すのは、自律的な学習者です。『学びたい』という内発的動機が芽生えた時に、生徒はものすごい力を発揮します。生徒の学習意欲をいかに引き出すかが、教師の腕の見せどころだと考えています」

そうして英語の学習意欲を高めた上で、目的に応じて文法指導や教科書を取り入れていく。高校でも、文法だけの指導はせず、単元内容を

生徒同士が英語で話し合ったり、絵や図に表しながら説明したりして、最後は生徒自身で問いを立て、調べて答えを出すといった活動をさせる。大学入試に対応した学習でも、志望校の過去問題など、生徒自身で問題を選んで解き、分かったことを生徒同士が英語で共有する。

思考の活性化・深化への配慮

教師の的確な発問と教科の専門性で生徒の思考の幅を広げる

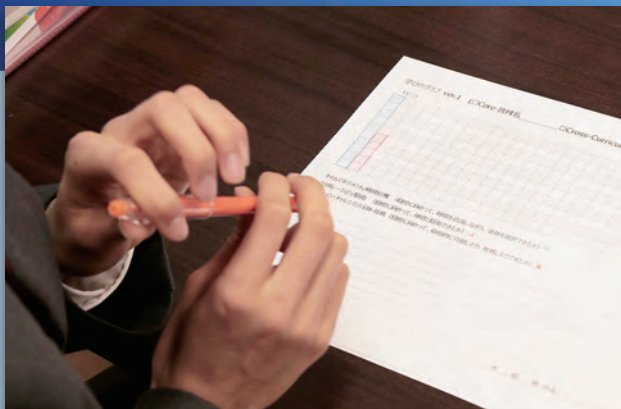
本時の授業は、英語と理科の合教科で、両教科を1時間ずつつなげた2時間とし、週1回、通年で設けている。山本先生と理科担当の山藤旅間先生のチーム・ティーチングで進め、生徒はSDGs（*2）に関連するテーマの問題解決型学習に取り組む。

「生徒の深い学びを実現しようと、理科との合教科でCBL（*3）を行っています。SDGsについて学んだ後、生徒同士で話し合っただし、その問題の解決策を立案・実行します。その過程で、英語の資料や科学の知識を提供するなどしています」

例えば、本時の授業では、日本ではあまり報じられていないプラスチックごみの輸出国の英文資料を使った。内容の説明をせずに生徒に見せ、何のグラフかを考えさせる。「プラスチックの排出量？」と言う生徒に、「惜しいね。

* 2 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。* 3 Challenge Based Learning の略。問題解決型学習の1つの方法。解決策を立案するだけでなく、その実践までを行うプロジェクト型学習。

12:23 3つの観点で自己評価



途中 10 分間の休憩を挟み、カフェの企画書作成、カフェの調査研究、カフェで提供する食事を使う野菜の研究、ブロックを用いた店舗イメージの制作など、生徒は各自の作業に没頭した。最後に、今日の活動を振り返り、授業冒頭に配布された自己評価シート「学びのグラフ」に、時間管理・協働・行動について、それぞれ 10 段階で自己評価した。

11:25 海外サイトの検索、調べ学習



次に、「最先端の学び」について、山本先生は世界最難関大学の 1 つと言われるアメリカ・ミネソタ大学を紹介し、インターネットで教学内容について生徒に調べさせた。同大学では問題解決型学習を行っていることを確認した上で、本時の学習テーマである「持続可能な世界につながるカフェづくり」の実現に向けて、生徒は役割を分担して調べ学習を行った。

場づくりへの配慮

集団で共通目標を達成する活動を通して、協働性や倫理観を高める

山本先生は、生徒同士の関係性づくりにおいて、「みんながハッピーであること」（倫理観）、「対等に対話を重ねること」（双方向コミュニケーション）、「試行錯誤しながら、よりよい方向へ行動すること」（自己修正）を大事にしている。その 3 つの観点は、社会規範に従いながら、様々な人々とのコミュニケーションを通じ

「export」はどういう意味かな? 「port」は?」などと、英単語を分解して意味を考えさせた。そのようにして、英語を知っていれば多様な情報が手に入り、知見が広がることを体感させる。そうした工夫を合教科の授業で行った上で、英語の授業では、4 技能の育成を行っている。

生徒が設定したテーマは、「持続可能な世界につながるカフェづくり」だ。最初に出た学校の緑化というアイデアが学校菜園の設置に発展し、最終的に、収穫した野菜を提供するカフェ設置という目標が決まった。現在はカフェのコンセプト、メニュー、経営方法などについて、役割分担をして調査している段階だ。生徒は企画を形にする中で、店内でジェンダー平等を表現したり、フェアトレードの食材をメニューにしたりと、社会問題の解決に向けて、自分たちにできることを具現化していく。

成果と課題

非認知能力の向上と教科学力の相関を検証するのが今後の課題

合教科の授業における生徒の学習意欲の高まりは、教師の予想以上だと言う。

「カフェづくりという目標を、生徒は 1 か月ほどで立てました。『やりたい』という思いを持てたことが、大きな推進力となっています」問題解決型学習を通じて、他者の意見に共感する力や自分の考えを言語化する力も高まっている。今後は、非認知能力の高まりと教科学力との相関を検証することが課題だ。

「英語学習への関心が低かった生徒が、『同世代 100 人と話したい』と言って英語の授業に熱心に取り組んでいます。話したいという意欲や非認知能力は高めてきましたが、それを教科学力の向上という見えやすい形にも結実できるように工夫を続けていきたいと思っています」

	1学期	2学期	3学期
学習内容	SDGsを通して社会課題を知る ・身近な問題に結びつける SDGs や社会課題を英語や理科の学習に結びつける ・教科書の SDGs に関連のある項目に付箋をつける ・英語の記事や動画から SDGs について理解を深める ・取り組みたいプロジェクトを設定する	SDGsを通して社会課題の解決法を考える ・実際の事例から学ぶ ・身近な問題に結びつける SDGs や社会課題を英語や理科の学習に結びつけ、分かったことを表現する ・学んだことを教科と結びつけて（時には英語で）表現する	自分の解決したい社会課題について発信する ・Study Festa (展示会) SDGs や社会課題を英語や理科の学習に結びつけ、分かったことや行動したこと、アイデアなどを外部へ発信する
身につけさせたい 資質・能力	・生徒同士でルールをつくることを通じて、倫理観を身につける 〈対人基礎力〉 ・受容・共感 ・気配り ・多様性理解 〈對自己基礎力〉 ・感情(主に怒り)のマネジメント ・ストレスのマネジメント ・主体的行動 ・ルールを守る 〈対課題基礎力〉 ・情報収集 ・本質理解	・目標に向けて対等に対話を繰り返すことを通じて、自己修正力を身につける ・目標に向かってよりよい方向に自分の考えや行動を修正する 〈対人基礎力〉 ・役割理解・連携行動 ・相互支援 ・話し合う・意見を主張する ・建設的・創造的な討議 〈對自己基礎力〉 ・独自性の理解 ・楽観性 〈対課題基礎力〉 ・目標設定 ・シナリオ構築 ・修正・調整	3つのスキルを意識して行動できることを目指す ①みんながハッピーであること(倫理観) ②対等に対話を重ねること(双方向コミュニケーション) ③試行錯誤しながら、よりよい方向へ行動すること(自己修正) 〈対人基礎力〉 ・多様性理解 ・建設的・創造的な討議 〈對自己基礎力〉 ・完遂 ・感情(主に怒り)のマネジメント ・ストレスのマネジメント 〈対課題基礎力〉 ・修正・調整 ・行動を起こす

*山本先生作成の年間シラバスを基に編集部で作成。

生徒の声



伊藤 鳳之心さん 小学校での外国語活動では、主に先生の説明を聞いたり、英語を使う活動をしたりしていましたが、山本先生の授業では、自分が調べたいことを調べられるので、楽しいです。特に、英語と理科の合教科の授業では、1つのことをたくさん資料を読みながら考えるので、視野が広がります。また、SDGs について考えるようになったことで、街を歩いている時、SDGs をテーマにした店に目がいくようにな

るなど、社会を見る目も変わりました。英語の授業では、ビンゴゲームで単語を覚えたり、英文をつくる縦横ドリルに取り組んだりしているうちに、自然と英語表現が身につけています。



中内 潮音さん 小学校の時は、教材の順番通りに学ぶ授業でしたが、山本先生の授業では、自分の興味・関心のあることを自由に調べながら学べます。調べている途中で自分にとって新しい発見があるなど、自然と学びが広がっています。自分の興味・関心に基づいて学ぶので、前向きに取り組めます。

定期考査は、SDGs などについて、自分はどう思うか、どうしたいかを英語で書く問題が中心です。自分の考えをまとめるのは大変ですが、言いたいことをどう表現すればよいか、辞書を引きながら考える中で、新しい表現を知り、それが自分のものになっていく感覚を持

た時は、大きな達成感があります。また、SDGs の学習を通して世界の問題について知ることができ、ニュースを見ている内容が理解できるようになりました。

探究学習を通して、 困難に立ち向かう姿勢と メタ認知能力を育む

変革のステップ

背景と課題

- 積極的に高みを目指そうという意欲を持つ生徒が減少傾向にあった
- 失敗を恐れずに挑戦し、想定外の課題を乗り越える経験を積ませるため、探究学習の導入を図ったが、思うように教師間の理解が得られなかった

実践内容

- 探究学習の推進** 2014年度にSGH(*1)の指定を受け、15年度には知の総合類型の1・2年次に「知の探究」を設置。高いハードルを設定し、生徒が失敗から学ぶ経験を重視した探究学習のカリキュラムを策定した。19年度からは、普通科の1・2年次でも探究学習を実施
- 生徒が探究学習の評価基準を策定** メタ認知能力を高め、振り返りを行いやすくするよう、生徒に探究学習の相互評価に用いるルーブリックの評価基準を策定させることにした

成果と展望

- 困難な状況においても粘り強く取り組む生徒が増加
- 課題研究での生徒の成長を目のあたりにし、教師が探究学習に前向きになった

失敗を恐れずに挑戦する生徒を育成すべく、探究学習に着目

普通科と国際理学科から成る兵庫県立姫路西高校は、140年以上の歴史を持つ学校だ。旧帝大を始めとする最難関国立大学の合格者を毎年出しているが、近年は生徒の進路意識の変化に課題感を覚えていたと、進路指導部長の井上智裕先生は述べる。

「本校のような地域の拠点校であっても、一昔前に比べると、生徒の気質は変わってきています。昨今、真面目で大人しく、いわゆる安全志向の生徒が増え、自分の殻を破って積極的にさらなる高みを目指そうとする意欲に課題を感じるようになりました。与えられ

PROFILE



校訓に「質実剛健・自主創造・友愛協調」を掲げる。2014年度にSGHの指定を受けたのをきっかけに、探究学習を推進するとともに、オーストラリアやアメリカへの研修などを通じた、国際理解教育にも力を入れている。

設立	1878(明治11)年
形態	全日制/普通科・国際理学科/共学
生徒数	1学年約280人

2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、東京工業大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、岡山大、九州大、大阪府立大などに229人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ320人が合格。

住所	〒670-0877 兵庫県姫路市北八代2-1-33
電話	079-281-6621

Web site <https://www.hyogo-c.ed.jp/~himenisi-hs/>

*1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。

たものをこなすだけでなく、自分の限界に向かつて努力することで得られる成功体験を高校生活で味わわせたい、そうすることで彼らの持つ高いはずの潜在能力を引き出したいと考えるようになりました」

そこで、2010年代に入る頃から、授業改善の気運が高まり、教科単位で探究学習を導入する動きが起り始めた。企画推進部長の藪内章彦先生は、当時から積極的に振り返る。

「探究学習では、答えが1つではない課題を設定するとともに、納得できる答えが得られるよう、多様な方法を試みます。よいと思った方法でも、実践すると想定外の事態に直



校長
山根文人 やまね・ふみと
教職歴36年。同校に赴任して3年目。「生徒の持つ無限の可能性を引き出せるよう、教育活動を充実させていきたい」

進路指導部長
井上智裕 いのうえ・ともひろ
教職歴28年。同校に赴任して12年目。「生徒に自信を持たせられる指導を常に追究していきたい」

企画推進部長
藪内章彦 やぶうち・あきひこ
教職歴28年。同校に赴任して12年目。「生徒にとって、学校にとって何が最善かを考え、教育活動を実践していきたい」

国際理学科長
林宏樹 はやし・ひろき
教職歴16年。同校に赴任して7年目。「立ち止まらず、前進していきたい」

面し、方法を考え直さなければならなくなることもあります。そうした学習に取り組ませることで、失敗を恐れずに挑戦し、試行錯誤しながら道を切り開いていく資質・能力を身につけさせようと考えていました」

ところが、「進学実績を出さなければならぬ」という思いからか、大学入試で求められる知識・技能の習得のための教科指導に重きを置くことが最優先され、探究学習は思うように根づかなかつたという。そこで、14年度にSGHが始まると同時に、その指定を受け、学校を挙げて探究学習に力を入れることにした。

「伝統校であっても、生徒の気質や社会の変化に対応し、指導改善を続けていくことが大切です。SGHにおける探究学習を推進することで、知識・技能にとどまらない資質・能力を育成できる指導体制を確立したいと考えました」（藪内先生）

生徒発表の評価者には、「遠慮ない指摘」を依頼

14年度の探究学習は、普通科の生徒から希望者を募って行ったが、15年度に知の総合類型を新設した後は、同類型の1・2年次に週1回の科目「知の探究」を設置して探究学習に取り組んでいる（18年度に同類型は国際理学科に改編され、「知の探究」は「課題研究」と改称）。具体的には、1年次は5人1組のグループ、2年次はグループか個人で研究テーマを設定し、地

域でのフィールドワークや、連携先の大学での取材・調査・実験などに取り組む。そして、その成果を英語でポスターやスライドにまとめて12月に発表し、優秀グループ・個人を選抜。選抜されたグループ・個人は、2月に設定された学校全体の発表会で、ポスターセッションやプレゼンテーションを行う。一連の活動で大事にしているのは、生徒が失敗から学ぶ機会にすることだと、国際理学科長の林宏樹先生は語る。

「生徒には、うまくいなくても諦めず、工夫を重ねてほしいと思っています。そうした粘り強さを育成できるよう、1年次から英語での発表に取り組ませるなど、高いハードルを設定しました。また、生徒たち自身で困難を乗り越える機会を大切にしたいので、教師は課題や問題点に気づいても、可能な限り助言は我慢し、見守ることにしています」

例えば、1年次には、「貧困をなくす方法を考える」といった漠然としたテーマで研究を始めてしまうグループが少なくない。夏季休業期間には、連携先の1つである京都大学の教員や大学院生らを前に中間発表を行うが、テーマ設定に課題があるグループは、研究対象の不明確さや分析の曖昧さなどを指摘されるといふ。

「生徒の発表を聞いてもらう大学教員や大学院生には、『失敗経験を大切にす』というねらいを伝え、課題や問題点を感じれば遠慮なく指摘してほしいと伝えています。講師を聞いて悔し涙を流す生徒もいますが、そう

した思いをばねにして、生徒は研究テーマを練り直し、調査や分析の方法を工夫していきます」(林先生)

例えば、スタート時に「観光による地域の活性化」をテーマに取り組んでいたグループは、中間発表後、「外国人旅行者を増やし、地域振興を図る方法の研究」と、より明確なテーマを設定。最終発表では、訪日ムスリムの観光客が増加していることに着目し、「ハラル料理(＊2)」を提供している姫路市内の飲食店の地図を作成するというアイデアを提案した。

「中間発表でつまづいても立ち直り、最終的には教師の想定を超えた水準に到達するグループは珍しくありません。一見すると控えめな生徒も、負けず嫌いであることが少なくなく、悔しい思いをすると大きな力を発揮できると実感しました」(林先生)

成長する生徒の姿を見て、教師間に探究学習の意義が浸透

SGHの指定を受けた当初は、指導に戸惑う教師もいたため、指導の負担を少しでも軽くできるよう、生徒に配布するプリントや冊子の作成、連携先の大学との折衝など、取り組みに必要な業務は、企画推進部の教師が行った。しかし、現在は、探究学習の指導に前向きに取り組む教師が増え、企画推進部と学年団の教師が協働して業務を担っている。

教師の意識に変化が生じた要因としては、探

究学習を通じた生徒の成長を実感したことが大きい。例えば、国際理学科では、1年次の3月にアメリカのハーバード大学などを訪問し、各グループが研究内容のプレゼンテーションを行うが、堂々と発表し、同大学の学生からの質問にも積極的に答える生徒が多いという。

「質疑応答では、予想していなかった質問を受けることもあります。生徒はその場で答えをまとめ、懸命に返答していました。文法の誤りなどを恐れず、自分の考えを発信しようという意欲を感じました。そうした生徒の姿を目のあたりにする中で、困難に立ち向かう姿勢を身につけさせるという探究学習の意義が次第に教師間に浸透していきました。そこで、19年度からは普通科の1・2年次でも、『総合的な探究の時間』を中心に、国際理学科の『課題研究』に準じた内容で探究学習を実施しています」(藪内先生)

生徒同士で協議して評価基準を定め、発表を相互評価

国際理学科の「課題研究」における発表では、生徒間でルーブリックに基づいた相互評価を行っている。以前は教師が作成したルーブリックを用いていたが、18年度から、教育評価論などを専門とする兵庫教育大学の奥村好美^{よみ}准教授の協力の下、ルーブリックの作成に生徒を参画させている。

「教師が与えた評価基準が、探究学習の実

図1 「課題研究」の発表の評価基準を生徒が策定する取り組みの概要

◎目的

- 探究学習の質の向上
探究学習の実践者である生徒が評価基準を策定することで、納得できる評価を実現し、研究の質をさらに高めさせる。
- 生徒のメタ認知の促進
生徒間の議論を通して、1つの発表にも様々な評価基準があることに目を向けさせる。そして、どのような発表を行う必要があるのかを考えさせるとともに、自分の発表についての客観的な振り返りを行わせ、強みや課題への意識づけを図る。

◎生徒が評価基準を策定する場面

- 1年次の9月
夏季休業期間に京都大学で実施した中間発表について、「課題研究のテーマの新規性と実行可能性」の観点から考察。
- 1年次の1月
12月に実施した発表について、「発表態度」の観点から考察。
- 2年次の7月
7月に実施した中間発表について、「テーマに対する分析方法の妥当性」の観点から考察。

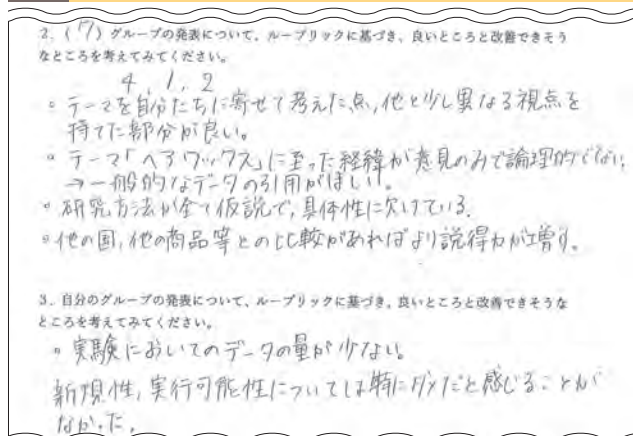
*学校資料を基に編集部で作成。

践者である生徒が理解しやすいものであるとは限りません。生徒が探究学習への意欲をさらに高められるよう、生徒の考えを評価基準に反映させています」(藪内先生)

生徒がルーブリックを作成する手順は、以下の通りだ。「課題研究」で設定された3回の発表について、それぞれ①課題研究のテーマの新規性と実行可能性、②発表態度、③テーマに対する分析方法の妥当性の観点から、評価基準を考察する(図1)。一度にすべてを考察することは難しいため、発表ごとに考察する観点を1

*2 イスラム教の戒律で許されている食材を用いた料理。

図2 相互評価に用いるワークシート(例)



生徒同士で評価基準を協議して作成したルーブリックを用いて、発表についての相互評価を行っている。*学校資料を基に編集部が一部改編。

つに限定した。いずれの発表でも、事前にその回で考察する観点だけを伝えておき、まず、生徒一人ひとりが自分の考えに基づいて発表を5段階で評価。次に、生徒同士で、どの発表に最良の「5」の評価をつけたのか、その理由は何かなどを協議し、統一した基準を策定していく。その際、段階ごとの評価基準が定めやすくなるよう、例えば、「5」を集めた発表と次点の評価の「4」を集めた発表の差は何であったのかから議論する。議論を通じて、「分かりやすい」「よい」といった抽象的な表現では、他者と評価基準は共有できず、振り返りの際に成長を実感しづらいことに気づき、生徒は評価基準の文言を具体化させていく。そうして自分たちで作

成したルーブリックを用いて、生徒は発表について相互評価を行っている(図2)。

「評価基準についての議論を通して、どのような発表を行う必要があるのか、生徒一人ひとりが明確に意識するようになりました。そうした中で、自分たちの発表方法の強みや課題を把握し、次回の発表に生かすなど、メタ認知を深めた生徒も少なくありません。大学に進学したり、社会に出たりした後も学び続けられるよう、自らの現状を客観的に捉え、改善を図る姿勢をしつかり身につけさせたいと考えています」(林先生)

大学進学後を見据え、今後も教育活動を充実させていきたい

SGHの指定をきっかけに強化された指導改善の成果は、生徒の姿に表れている。探究学習に取り組む中で、自分の考えを堂々と述べられるようになる生徒が多いことは、前述の通りだ。探究学習を通して社会でやりたいことを見つけ、その実現に必要な学問を学べるよう、全国の大学・学部から志望校を探するなど、進路意識も向上し、学問や進学先へのこだわりを持つ生徒が増えた。例えば、模擬試験などで思うような判定が得られなくても、第1志望の実現を目指し、粘り強く学習を続けるようになった。そうした生徒は、「一般入試だけではなく、推薦・AO入試にも視野を広げている」と、井上先生は話す。

「何をどの大学で学びたい」というところまで具体化された希望進路へのこだわりが、複数の入試区分で挑戦しようとする意欲につながっているのだと感じます。また、推薦・AO入試の志望理由書などで探究学習の成果をアピールする生徒も多く、自分の研究に自信を持っていることがうかがえます」

同校のSGHの指定は18年度で終了したが、今後も、探究学習を始めとした既存の取り組みを継続するとともに、新たな取り組みを積極的に行い、国際社会で活躍できる人材の育成に力を入れていく考えだ。例えば、19年度の1・2年度の探究学習では、地域の企業の支援も受け、生徒がオーストラリアや台湾の姉妹校の生徒とグループを組んで旅行企画を立案する「トラベルプラン・コンテスト」を始めた。インターネットによるテレビ電話サービスなどを使って、同校と姉妹校の生徒が英語で企画を練り上げたり、グループごとにその内容を発表したりする機会を定期的に設定した。20年度からは、地域の他の高校にも参加を呼びかけようと計画している。

山根(みね)文(ふみ)人(ひと)校長は、今後についてこう語る。

「本校は、生徒を志望大学に送り出すだけではなく、大学進学後を見据えた教育活動を大切にしています。今後も、プレゼンテーション能力や英語力など、大学での学びに必要な資質・能力を育めるよう、取り組みを充実させていきたいと考えています」

●同校の国際理学科では、企業と連携し、探究学習をさらに充実させる取り組みの1つとして、2019年度から、「総合的な探究の時間」「課題研究」などの授業で、新たな価値を生む方法論「フォーサイト・クリエーション」を学ぶ時間を設けている。ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト内「マナブコラム」(<https://berd.benesse.jp/special/manabucolumn/manabinoba5.php>)で、その内容を紹介している。

熊本県立熊本西高校

外部連携、校務改革

大学・専門学校と連携した 独自の体験授業で、 生徒の進路・学習意識を向上

変革のステップ

背景と課題

- 進路意識が希薄で、学習意欲が低い生徒の増加
- 業務過多によって、教師が生徒と向き合う時間が少なくなっていた

実践内容

- **外部連携** 県内の私立大学や専門学校と連携し、同校の生徒向けの授業を受講する「西高アカデミックインターンシップ (NAIS)」を、1年次に実施。また、一般社団法人・大学と包括連携協定を締結。大学の最先端施設の利用や、大学・企業が開催する講座への無料参加などができるようにした
- **校務改革・働き方改革** 教師の負担軽減を図るため、朝課外を希望制にし、発展的な内容に変更。全校務を一覧化して見直し、非効率な業務を削減

成果と展望

- 事前指導や振り返りを徹底し、NAISの効果を高めることで、生徒の進路意識や学習意欲が向上
- 教材研究のための時間を増やすことができるとともに、生徒との面談期間も設置

PROFILE



「清・明・和」の校訓の下、知・徳・体の調和の取れた教育を通じて、世界的視野に立った人材育成を目指す。普通科体育コースの生徒を中心に部活動も活発で、野球、ラグビー、なぎなた、柔道、剣道、陸上、水泳などの部が活躍。

設立	1974 (昭和 49) 年
形態	全日制 / 普通科・普通科体育コース・理数科(*) / 共学
生徒数	1学年約360人

2019年度進路実績(現役のみ) 国公立大は、高知大、佐賀大、長崎大、熊本大、宮崎大、北九州市立大、熊本県立大などに25人が合格。私立大は、専修大、法政大、福岡大などに延べ236人が合格。短大、専門学校進学105人。就職26人。

住所	〒860-0067 熊本市西區城山大塘 5-5-15
電話	096-329-3711

Web site <https://sh.higo.edu.jp/kumanishi/>

* 2020年度、理数科はサイエンス情報科に改組。

1年生全員が大学・専門学校に 5日間通い、授業・実習を体験

熊本県立熊本西高校では、地域の外部機関と連携し、生徒の意識改革、教師の指導改革を推進している。2019年度には、1年生が県内の大学や専門学校の授業・実習を5日間にわたって体験する「西高アカデミックインターンシップ」(以下、NAIS)を始めた。18年度に着任した柿下耕一校長は、同校の課題を次のように捉えたと語る。

「本校は、高校入試で低倍率の状況が続いていました。本校の以前の様子を知る教師は、現在の生徒の進路意識の希薄さや学習意欲の低さに驚いていました。そこで、1年次の早

い段階で高校での学びと大学・社会とのつながりを実感させて、それを自身の将来について考えるきっかけとし、目的意識を持って高校生活を送れるようにすることを目指した取り組みを考えました」

そうして始められた取り組みが、NAISだ。18年度は、3大学の協力を得て、1年生から希望者を募り、7月と10月の2回、実施した。だが、参加を希望しなかった生徒にこそ視野を広げる機会を与えたいと考え、19年度は、1年生全員



校長 柿下耕一 かきした こういち
教職歴33年。同校に赴任して2年目。『生徒を変えろ』『教師を変えろ』『学校を変えろ』を常に考えて行動する。



進路指導主事 森山幹俊 もりやま みきとし
教職歴31年。同校に赴任して12年目。『生徒が有形無形に敏感に反応し、適切な行動ができるよう支援したい』



1学年主任 錦戸真介 にしきと しんすけ
教職歴23年。同校に赴任して8年目。『教育に終わりはない』という信念の下、もう一步、もう一步先へと生徒を導きたい。



進路指導部・1学年担任 森田まゆみ もりた まゆみ
教職歴8年。同校に赴任して1年目。『生徒の持つ無限の可能性を引き出すために挑戦し続ける教師でありたい』



進路指導部 打越敬洋 うちよし たかひろ
教職初年度。同校に赴任して1年目。『謙虚に学ぶ姿勢を常に忘れず、生徒一人ひとりのよき手本となるような人でありたい』

が参加できる体制を目指して、進路指導主事の森山幹俊先生を中心に近隣の教育機関と交渉を続けた。その結果、県内の私立大学6校、資格取得・医療系の専門学校2校と連携し、8〜9月、1年生全員が参加する体験授業が実現した(図1)。

生徒はまず、体験先を大学と専門学校のどちらから選ぶ。大学の場合は、複数の大学に5日間連続で通い、大学での学びについて説明を受け、施設を見学した後、授業・実習を受講する。専門学校の場合は、同じ学校に5日間連続で通い、医療や介護、理学療法などの授業を受講する。いずれも、同校の生徒向けに企画された授業・実習だ。

大学からの指摘を受けて、生徒への事前指導を強化

1年生全員参加の実現には、同校の粘り強い交渉があった。

「最初は、大学教員に直接連絡し、体験授業の実施を交渉しましたが、高大連携に理解が得られない場合もありました。そこで、各大学の入試課や広報課に相談したところ、『地域の明日を担う生徒の育成に協力したい。授業を受けた生徒が本学を志願しなかったとしても、高校との連携は重要』と、大学内の調整に積極的に動いてくれました」(森山先生)

1大学につき1学年団の教師1〜2人が担当者となり、各大学との打ち合わせを綿密に行っ

図1 「西高アカデミックインターンシップ」概要

◎目的

大学・専門学校での授業・実習体験を通して、高校の学習活動に対する興味・関心を高めるとともに、将来の職業との関係を学ぶ。また、職業を意識した具体的な進路目標を定める一助とする。

◎協力大学・専門学校

九州看護福祉大学、熊本学園大学、熊本保健科学大学、尚絅大学、崇城大学、東海大学、大原学園、九州中央リハビリテーション学院

◎事後指導

毎日の終わりには、ポートフォリオの一環として日報を記入し、学びの理解を深められるようにした。

*上記は2019年度の内容。学校資料を基に編集部で作成。

た。そして、授業当日は、各大学に教師も同行し、必要に応じて指導するなど、大学教員に大きな負担が生じないように留意した。実は、18年度にNAISに協力してくれた大学から、「不真面目な生徒がいたが、引率の教師は注意もしなかった。生徒も教師もやる気があるのか」といった厳しい指摘を受けていた。

「引率した教師には、『大学の授業の場で、高校の教師が口を出すべきではない』といった考えがあったのだと思いますが、高校側の指導が至らず、大学側に迷惑をおかけしてしまっただけで、恥ずかしい限りでした。その反省を踏まえて、19年度は事前指導を丁寧に行いました。その結果、すべての大学から『生徒が真剣な姿勢だったので、授業がやりやすかった』など、評価の声をいただきました(P.40写真)」(森山先生)

事前指導では、生徒に企画の意義を繰り返し



写真 崇城大学工学部ナノサイエンス学科での授業。大学の設備を借りて実験を行った。生徒が関心を持てるように、企画において教師は大学側と綿密な打ち合わせを行った。

伝えたと、進路指導部の打越敬洋先生は語る。

「今回の授業は、本校の生徒のためだけに行われます。各大学が自分たちのために一生懸命準備してくれたことを生徒が理解し、感謝の気持ちを持って臨めるようにしました」

事後指導も徹底した。生徒は、毎日の授業後に授業内容や感想、学んだことを、リフレクシヨンシートにまとめた。そして、教師4人が分担して、同シートをその日のうちに添削し、「授業内容をもっと具体的に書こう」「メモを反映させよう」といったアドバイスを添えて翌日に返却。最終的には、添削内容を基に生徒が修正したシートを、当該大学に提出した。1学年担任の森田まゆみ先生は、生徒の変化を次のように感じたと言う。

「初日は、校舎の感想など、授業と関係の

ないことを書く生徒もいましたが、日を重ねるうちに内容が具体的にになり、最後は誤字を訂正するだけでよいレベルにまで、多くの生徒が達しました。1日に30〜40人分のリフレクシヨンシートを添削するのは大変でしたが、わずか5日間でも、生徒が大きく成長していく姿を目のあたりにすることができ、喜びとやりがいを感じました」

NAISの運営が 教師の指導力向上にもつながる

生徒のNAISへの評価は高い。19年度の事後アンケート（5段階評価）では、授業満足度が平均4・25、授業に臨む態度の自己評価は平均4・28だった。1学年主任の錦戸真介先生は、次のように語る。

「自由記述欄には、『自分の学習量は足りないと実感した』など、自身の学習を振り返るコメントもありました。そうした生徒の意欲の高まりを実際の学習行動に結びつけられるかどうかは、教師の指導力にかかってきます。上級学校での学びや社会に対する生徒の関心の高まりを、私たちがさらに高められるよう、日々の授業を工夫するなどしていきたいと考えています」

生徒の日常生活にも変化が見られる。学年集会などでの参加態度が落ち着き、2学期の終業式では、教師が生徒を注意する場面がほとんどなかった。

「1年次半ばという早い段階に、多くの教育機関の協力で実現した校外の体験学習を経たことで、周囲を見て行動できる力が身につけてきていると感じています。『進路実現のために必要なことが分かった』『受けた授業は希望分野ではなかったが、興味が湧いた』といった声もあり、視野を広げ、進路意識を高めている様子も見て取れます」（打越先生）

NAISは、教師の視野を広げる機会にもなった。1学年団の教師全員が連携先を受け持ち、各大学と話し合いながら当日のプログラムを構築。生徒への事前指導も徹底し、NAISにかかわる全員が当事者認識を持って当日に臨んだ。学外の機関とのかかわりは得がたい経験だったと、錦戸先生は振り返る。

「当初、私は取り組みの意義を十分理解できていませんでしたが、プログラムを構築していく過程で、地域の大学・専門学校を巻き込んだ大きなプロジェクトであると実感しました。何より、生徒の生き生きとした表情や、授業後のしつかりした内容の感想を見て、NAISを実施してよかったと思えました」

学年団の雰囲気明るくなったのも、大きな成果だと森山先生は言う。

「大きな取り組みを成功させたことで、教師は指導に自信を持ち、生徒をさらに伸ばしたいという意欲を高めていると感じます。学習指導も含めて、学年団が一丸となり、同じベクトルで熱心な指導ができています」

すべての校務を洗い出し、指導や学校行事などを精選

同校では、大胆な校務改革も推進中だ。柿下校長は、18年度の赴任直後に2日間かけて、すべての主任・主事十数人と面談した。そこでの話で感じたのは、教師の負担感の大きさだった。

「先生方に校務や指導の状況を聞いてみたところ、担任や副担任をしながらの分掌業務や学校行事、会議に忙殺され、生徒と向き合う時間の確保を求めていることが分かりました。丁寧な指導が必要な生徒も増えていきます。どの生徒に対しても、それぞれに合った指導を充実させるためには、教育効果の期待が薄く、ねらいに見合わない取り組みを見直す必要があると考えました」（柿下校長）

柿下校長は、全教師にアンケートを行い、教師にかかる負担の割に教育効果の低い取り組みを明らかにし、年度途中ではあったが、校務改革に踏み切った。大きな変更については、保護者にも丁寧な背景を説明し、実行した。その一例は、朝課外だ。それまでは全員参加で、復習中心の補習を行っていた。しかし、教材研究の時間が減少し、授業で学力を向上させられていないと感じている教師が多かった。そこで、7月から運営委員会や職員会議で検討を重ねた結果、10月から、朝課外にかかわる教師を少なくするために希望制とし、予習が必要な発展的な内容に切り換えた。

図2 「校務棚卸表」(抜粋)

No	分掌名	小分掌名	時期	業務内容	1回あたりの時間	年度			年間業務量		
						日	週	月			
1	総務全般	新年度の準備	4月上旬	職員全員の資料作成等	5			1	5		
			4月4日	入学式要項作成	10			1	10		
			4月4日	新転入者オリエンテーション	2			1	2		
			4月4日	入学式パンフレット作成	3			1	3		
			4月3日	職員室産産作成	3			1	3		
			4月6日	レターケース、欄名前張り替え	2			1	2		
			4月6日	卒業式実施要項作成	10			1	10		
			2月22日	卒業式案内作成・配付	3			1	3		
			1月17日	入学式案内作成・配付	2			1	2		
			3月8日	入学式配布物の装貼め	2			1	2		
			総務部会					0.5	1		24
			通年								
2	式典	始業式・終業式	3月	司会	1.5			6	9		
			3月	進行表・願書作成	1			6	6		
			3月	司会	2			1	2		
			2月	司会・設営	8			1	8		
			2月	進行表・願書作成	2			5	10		

「校務棚卸表」は、①業務の見える化と総量把握、②業務・事業の20%程度の削減、③学校行事の20%程度の削減、④学年会や分掌会の回数減など、7つの視点で、各分掌で作成。すべての分掌で業務を見える化し、校務改革に取り組んだ。

*学校資料を抜粋して掲載。

一方で、必要性が認められた取り組みは、新たに追加した。2学期からは面談週間を学期に1回設定し、生徒との対話を促進した。部活動が盛んな同校では、放課後は練習に時間が取られていた。しかし、生徒指導の充実のためには定期的な面談が不可欠だとし、その時間を確保した。

また、「校務棚卸表」(図2)を用いて、校務分掌・学校行事を見直した。18年度2学期に、すべての分掌の業務内容とそれにかかる時間の一覧表を作成。柿下校長が査定、助言をしながら、業務の20%削減を目標とした改革案をつくり、19年度から実施した。その結果、重複する業務を清算し、かけ持ちをなくした1人1分掌体制と

Society 5.0を生き抜く地域人材の育成を図る

19年12月には、地域創生を推進する一般社団法人SCBラボ、人工知能の研究等にも力を入れる崇城大学と包括連携協定を締結。生徒が、両者が開催する講演や講座に無料で参加したり、大学所有の最先端施設を利用したりすることができるようになった。19年末には、理数科や普通科特進クラスの生徒が、ドローンのプログラミングや地域の防災マップづくりを行う講座を受講した。柿下校長は、展望をこう語る。

「卒業生の大半が県内に残る本校は、これまでも地域とのつながりを大切にしてきました。包括連携協定は、SCBラボや崇城大学と『Society 5.0を生き抜く地域人材の育成』という課題意識が合致し、実現したものです。どの地域もそうだと思いますが、本県でも地域人材の育成が急務です。協定を最大限に活用して、生徒の視野を広げ、地域の活性化に貢献できる人材を育てていきます」

今後の課題は、2年次での企業インターンシップの実現だ。全員参加を目指し、企業や熊本県教育委員会と調整中だ。さらに、SSHに申請し、探究学習の実施も計画している。短期的には探究学習の成果を推薦・AO入試に生かして進学実績を向上させつつ、地域社会で活躍するための資質・能力を育てていく考えだ。

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、改善を図る本コーナーも、連載5年の節目を迎えた。そこで、今号は、本コーナーでおなじみの先生方に、これまでを振り返りながら指導ツール改訂の意義について語り合ってもらった。

指導ツールに対する考え Before

高橋 学校で長年使われているもの、先輩から受け継いだものをそのまま使うことが多かった

岡本 教師が知りたい生徒の情報を効率的に収集するという目的のものが多かった

柳井 指導ツールを作成したり、改善したりするための観点が分からなかった

検討メンバー



群馬県立
高崎東高校
高橋真人
たかはし・まさと

◎教職歴 16年。同校に赴任して2年目。教務部。数学科。

学校プロフィール 全日制/普通科/共学/1学年約200人/2019年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、群馬大、埼玉大などに17人が合格。私立大は、獨協大、法政大などに延べ110人が合格。



埼玉県・私立
武南中学校・高校
岡本眞一郎

おかもと・しんいちろう
◎教職歴 37年。同校に赴任して2年目。広報部。英語科。

学校プロフィール 全日制/普通科/共学/1学年約400人/2019年度入試合格実績(現浪計)/国公立大は、千葉大、東京工業大などに29人が合格。私立大は、上智大、早稲田大などに延べ660人が合格。



宮崎県立
延岡商業高校
柳井健二

やない・けんじ
◎教職歴 27年。同校に赴任して1年目。教頭。

学校プロフィール 全日制/商業科、会計科、流通経済科、経営情報科/共学/1学年約200人/2019年度進路実績(現役のみ)/国公立大は、大分大などに4人が合格。私立大は、久留米大などに延べ26人が合格。短大、専門学校進学55人。就職92人。

指導ツールに対する考え After

高橋 「生徒が取り組みやすいか」「生徒が前向きになれるか」を考えながら、指導ツールを主体的に改訂するようになった

岡本 その時々学びを振り返るなどの、「生徒目線」で指導ツールを捉えることが大事

柳井 その指導ツールを使って、どんな指導を実践することを目指すのかという、「そもそも」を語る機会を意識的につくりたい

指導ツール改訂の重要な観点は 教師目線から生徒目線

編集部 本コーナーは2015年4月号より、様々な指導ツールを改善すべく、全国の先生方と議論を行ってきました。まずは、これまでの改訂についての感想をお願いします。

岡本 全体を通して、教師が知りたい情報を集めるといった機能を担っていたツールが、先生方との議論を経て、生徒にその時々学びを振り返らせるツールに改訂されるケースが多かったと思います。ツール改訂においては、「生徒目線」が重要なのだと気づきました。

柳井 例えば「未来づくりシート」(P.45)の改訂前は履歴書、改訂後はポートフォリオ、というイメージですね。効率的に生徒の情報を知るツールが、生徒とのコミュニケーションツールとなりました。

指導ツール改訂の意義

5年間で取り上げたツールの学年別テーマ一覧

ツール 使用学年	シート	掲載年	月号
1年生	1年生 初期指導の面談ツール「未来づくりシート」	2015	4
	1年生導入期(4月から夏休み前まで) 学習計画・記録表	2016	4
	1年生 夏休みの振り返り指導ツール	2015	8
	1年生秋 進路志望調査用紙	2016	10
2年生	2年生1学期 模試への意識づけシート	2018	4
	2年生・夏休み前後 オープンキャンパス指導ツール	2015	6
	2年生2学期 第1志望研究	2018	8
	2年生2学期 ポートフォリオ	2019	8
	2年生3学期 受験シミュレーションシート	2017	12
	2年生3学期 志望理由シート	2018	2
	3年生0学期 学習計画・記録表	2016	12
	3年生0学期 出願書類作成用 調査用紙	2017	2
	2年生春休み前(3年生0学期) 学習点検シート	2016	2
3年生	3年生夏休み前 弱点克服シート	2017	6
	3年生夏休み 志望校別過去問研究	2016	6
	3年生2学期 学習予定表	2017	8
	3年生2学期後半 面接対策指導ツール	2015	10
	3年生12月 三者面談シート	2015	12
	3年2学期 志望校検討会資料	2019	10
	行事振り返りシート	2016	8
学年横断	全学年 年度初期 年間目標達成シート	2017	4
	全学年 進路講演会 振り返りシート	2017	10
	全学年共通 夏期課題一覧	2018	6
	全学年 学期リフレクションシート	2018	10
	1、2年生 模擬試験振り返りシート	2018	12
	1、2年生 三者面談シート	2019	2
	「課題研究」ループリック	2019	4
	探究学習指導・共有シート	2019	6
	全学年 部活動目標達成シート	2019	12



左記一覧のツールはすべて加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」もしくは該当号のサイトをご覧ください。

● 2015年4月号からスタートした本コーナーで扱った指導ツールを、学年別に一覧化した。進路指導や教科指導、部活動、学校行事など、多様なテーマの指導ツールを取り上げてきたことが分かる。本コーナーで改良した指導ツールは、現在も上記のサイトでダウンロード可能であるが、ぜひ、「どのような指導ツールが、どのような意図をもって改訂されたのか」を、検討メンバーの対話の中から読み取っていただきたい。

高橋 担任と生徒、生徒同士、学年間など、学校を縦や横につなげるような指導ツールの改訂も多かったと思います。

岡本 3年生0学期の「学習点検シート」(本誌16年2月号)は、生徒にその時点の計画を書かせるだけでなく、書いたことを基に、生徒同士で対話させるシートへと進化しました。

柳井 指導ツールについて先生方と議論する中で、ツールのそもそもの目的を問い直し、「書かせるよりも、面談で問うべきではないか」などと、生徒へのアプローチが変わることもありました。ツールについての議論が、指導の本質を考える機会になっていったと思います。

指導の本質を問い直す 対話の機会の重要性を実感した

編集部 指導ツール改訂の醍醐味は、表面的な改善ではなく、指導の本質を問い直す部分にあるということですね。

高橋 学校で長年使われている指導ツールを、その目的をよく考えず、前例踏襲的に使っていたこともありました。どのような状況の生徒に、何を目的に、どんな指導ツールを使って、どのように働きかけるのかなどを整理する必要性を、議論を通じて実感しました。

柳井 行いたい指導の本質を考えれば、Afterツールよりも Before ツールの方が自校には適していると思ったこともあります。「進路講演

指導ツール改訂の意義

会 振り返りシート」(本誌17年10月号)は、将来の自分と今の自分を接続するという点はずまく改善されましたが、社会課題に対する意識が十分に醸成されていない生徒も少なくない本校では、改訂前の方がよいと思いません。

岡本 どういうフォーマットのツールか、ではなく、何のためのツールか、という目的を押さえることが最も重要な視点です。「夏期課題一覧」(本誌18年6月号)を改訂した際、夏期課題の意義を話し合う中で、主体的な学習を促すために「夏に身につけたい力」を生徒に聞くという発想が私の中に生まれました。指導についての「そもそも」を話し合うことの重要性を実感した瞬間でした。

柳井 検討メンバーとして参加する中で、私は、物事を批判的に捉えることの大切さを学びました。そして、自校の指導についても、なぜそうなっているのか、何を目指しているのかといった、「そもそも」を深掘りしたいと思っています。学校の会議の多くは情報伝達が中心ですが、指導の本質や教育活動の目的を問う直す姿勢で話し合う時間も必要ですし、それは自分のような管理職が、率先してつくるべき時間なのだと考えています。

同じ高校の教師が自校でツールを改訂するために

編集部 本コーナーに検討メンバーとして参

改訂ツール「未来づくりシート」(2015年4月号)をさらに改訂! 若手教師による面談ツールのバージョンアップ

未来づくりシート ～夏休み前～

1年5組()番 名前()

未来づくりの土台(振り返り)

・1学期に自ら取り組んできたことで、一番印象に残っていること、やってきて充実感を覚えたことは何ですか?

・困ったことや悩みはありますか?

・1学期に「やれば良かった」と感じたことはありませんか?

→ (4年制大学・短期大学・専門学校・就職・その他) (県内・県外)

→ _____ 学部 _____ 学科 _____ ←具体化したかな?

★その学部に必要な受験科目は?

国(現古漢)・英・数学(I・A・II・B・III)・理科(生物・物理・化学・地学()基礎)

社会(地理(A・B)・日本史(A・B)・世界史(A・B)・現社・政経・倫理)

→ _____ 教科 _____ 科目 _____

・オープンキャンパスの予定: 月 日()に _____ 大学 _____ 学部を見てく

何を? ① _____ ② _____ ③ _____

★夏休みはまとまった勉強時間を確保するチャンス!!

学習目標を3つ立てよう!! ←達成内容を書く

1. _____

2. _____

3. _____

君の夏の決意

▼夏の1日の過ごし方

夏の日1日の目標勉強時間!! (有意義な学習時間の確保を!)

1日 _____ 時間、勉強をする!!

※余談ですが、先日予備校に行きました。一橋大学を目指す学生が「1日12時間勉強!!」と書いていました。目標を決めた学生は強い!!

加した多くの先生が、「こうした指導の本質を問う直すような話し合いの場を自校でもつくりたい」とおっしゃっていました。ただ、その一方で、先生方に「そもそも」を話し合う時間的な余裕がないというのも事実です。

岡本 学校のオフィシャルな会議で、しかも全教師が参加する形での実現は難しいでしょう。私は、井戸端会議的に自由に語り合う雰囲気をつくっていく方がよいと思います。

高橋 若手の先生に「このツール、どう思う?」

私の後輩の先生が、異動先の高校で運用したシートです。4月には既存の「未来づくりシート」を使用しましたが、その高校では、1年次の夏季休業中に必ず1人1校オープンキャンパスに行くため、その意識づけを目的に既存のシートを改訂して「夏季休業前」バージョンを作成しました。学習時間の円グラフを設けたり、後輩の先生自身が研修で知った学習時間に関するエピソードを加えたりして、夏休みの過ごし方について意識を高めるというシートに仕上げています。





連載5年！人気の改訂ツール

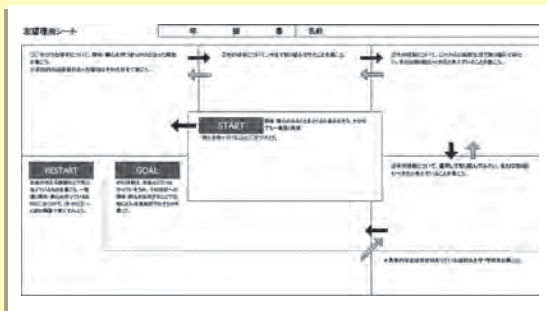
その1 1年生初期指導の面談ツール
「未来づくりシート」 (本誌 2015年4月号)

高校入学直後の1年生向けの「進路希望調査」を「未来づくりシート」として改訂。中学校までの経験を土台に、自分のやりたいこと、強みなどを記入させる。未記入部分も、記入できない・しない理由を面談で探ることなどに活用することを提案。生徒の自己肯定感を高めることを重視した問いかけにあふれた指導ツールに改訂された。



その2 2年生3学期 志望理由シート
(本誌 2018年2月号)

将来、社会とどのようにかわりながら生きていくのかという観点と、自分が最も興味・関心を持っていることを今後も深めていくという観点から、志望理由を明確化させようと改訂したシート。自分の志望がどのような要素によって形づくられてきたのかを、過去、現在、未来の時系列を踏まえて可視化できるようなシートを考案した。



「一緒に改善して、私と一緒に学年主任に提案してみようよ」などと声をかけてみたいですね。
岡本 理想、情熱がある若い先生を巻き込むことは、大きな変化のきっかけになるかもしれません。本校にも熱心な若手の先生が何人もいます。若手ゆえに、周囲に自分の考えをうまく伝えられていないことがあります。その熱意を大切にしたいと強く思います。
柳井 私も、以前はツールを生み出したり、既存のものを改訂したりするために大事なことが分かっていませんでした。だからこそ、当時の私に伝えるつもりで、生徒が取り組みやすいか、問いかけの言葉は適切か、ツールのネーミングは目的とずれていないかなど、改訂の観

点を本コーナーで議論してきたつもりです。先輩から受け継いだツールも、目的に合わせて改訂していくプロセスを、若い読者の先生方に追体験してほしいと思っています。
編集部 本コーナーはこれまで、異なる学校の先生に集まってもらい、1つの指導ツールを多様な視点で改訂してきました。次号の4月号からは、1つの学校を訪問して、その学校で使われている指導ツールを、同校の先生方で改訂するコーナーにリニューアルします。
柳井 同じ学校でも、先生によって大事にしていることは違います。だからこそ、指導の本質を丁寧確認し合う様子を誌面で伝えてもらえれば、私たち読者にとっては、指導の観点

のすり合わせ方などの参考になると思います。
高橋 その学校ならではの「こだわり」を持って改訂に取り組んでほしいですね。振り返ってみると、私は、「学力面で課題がある生徒でも活用できるか」という観点を常に大切にしていました。「こだわり」を持ち寄ることで、活かす具体的な議論ができると思います。
岡本 同じ学校の先生が話し合うのであれば、ぜひ、その学校ならではの、高校3年間の連続性を意識した指導ツールの改訂と運用に挑んでほしいです。先生方が多忙を極めている現状があるからこそ、自校の指導の本質を教師同士が話し合うことの価値に、改めて気づかせてくれるコーナーになってほしいです。

価値創造への情熱をデータとともに 他者へ伝え、協働して未来を創る

大学院のSTEM / STEAM教育



授業では、グループごとにテーマを決めて、商品やサービスの開発を進めていく。「理想の通勤バッグ」「理想の制服」など、テーマは多様だが、「理想」は科学的な手法で描かれていく。

STEM / STEAM 教育とは

STEMは、Science、Technology、Engineering、Mathematicsの頭文字で、STEM教育は、科学・技術・工学・数学に重点を置いた教育、人材育成のこと。STEAM教育は、それにArt(芸術をはじめとする文化的教養)が加わる。STEM / STEAM教育は、各教科の学習を、実社会での問題解決に生かしていくための教科横断的な教育のことである。2019年4月に中央教育審議会に諮問された「新しい時代の初等中等教育の在り方について」においても、Society5.0に対応した高校教育のあり方として、文系・理系にかかわらず、様々な科目を学ぶことや、STEAM教育の推進が審議事項に挙げられている。

STEM / STEAM 教育のポイント

- ① 理数系分野を中核とした学際的・教科横断的な学び
- ② 知識を統合的に活用しながら、実社会の問題解決を目指す学び
- ③ 知識・技能だけでなく、関心・意欲・態度も高まる学び

出典：CRET 特定非営利活動法人 教育テスト研究センター「平成30年度新時代の教育のための国際協働プログラム 成果報告書」

私が訪問しました

神奈川県・私立
神奈川学園中学・高校
中野真依
なかの・まい



◎教職歴5年。同校に赴任して4年目。理科(物理)担当。中学校3年生の担任を務める。民間企業での13年間の勤務を経て、教職の道に進む。「10代のうちに学んでほしいことは、一生モノの『学び方』です。そのためにも、生徒に教えずぎないこと、与えずぎないことを心がけています。」

神奈川県・私立神奈川学園中学・高校

全日制 / 普通科 / 女子校 / 1学年約200人 / 2019年度入試合格実績(現浪計): 国公立大は、東京外国語大、横浜国立大、大阪大、首都大学東京などに7人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、明治大、早稲田大などに延べ441人が合格。

私が案内しました



慶應義塾大学大学院
健康マネジメント研究科
渡辺美智子
わたなべ・みちこ

◎九州大学大学院総合理工学研究科修士課程修了。理学博士。関西大学経済学部助教授、東洋大学経済学部教授などを経て、慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科教授。専門は統計学、特に多変量解析(潜在構造分析)と統計教育。RESAS(リーサス)*を活用した「地方創生☆政策アイデアコンテスト2019」の審査委員を務めた。

慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科

看護学専攻、公衆衛生・スポーツ健康科学専攻の2専攻を有す。渡辺先生は、公衆衛生・スポーツ健康科学専攻の医療マネジメント学プログラムで、ヘルスケア領域の組織の経営管理や、医療・介護サービスなどのデータを活用したマネジメントの専門家の育成を目指す授業を担当する。

*地方創生の取り組みを情報面から支援するために、経済産業省と内閣官房(まち・ひと・しごと創生本部事務局)が提供する、地域経済分析システム。人口動態や産業構造、人の流れなどの官民ビッグデータを集約し、可視化する。
<https://resas.go.jp/>



理想の未来とその実現の道筋を他者と共有する力を
生徒はSTEM教育で身につけるのですね。



渡辺 STEM / STEAM教育（以下、STEM教育）では、数学などの教科の知識・技能を手段として使い、社会の一員として実現したい価値や理想の姿を描き、それを情熱をもって周囲に伝え、実現する力の育成を目指しています。理想を伝える際に不可欠となるのが、他者との協働を通じて得たデータに基づく根拠であり、それを効果的な表現方法によって説得力を高めていく、「Storytelling with Data」と言える活動です。今日の授業「サービスデータサイエンス」は、新しい商品やサービスの開発を通して、統計データに基づいた、問題解決のプロセスの習得を目的としています。学生たちが、それぞれの課題に応じて、テーマを設定し、分析手法を使って、理想の状態を明らかにしていきます。

中野 高校生は、社会問題に共感はしますが、問題解決の道筋を構築し、他者と共有する力がまだまだ弱いのです。だからこそ、その道筋を明確化し、みんなの問題として語り合うために、データを活用することが重要なのだと思います。授業を見学して感じたのは、大学院のSTEM教育も高校のそれも、理想の社会を描き、その実現のために、他者と協働する

科学的な手法を学ぶものだという事です。そのため、題材は身近なものでよいのだと思いました。理想のレトルトカレーのパッケージの開発というテーマは、高校生でも夢中になりそうです。

渡辺 自分にとって興味のあるテーマで考え、分析するからこそ、知識は身につくのです。そして、知識を思い浮かべることで、以前、小学生が、商店街を活性化させる方法を考えようとした時、地域の住民にインタビューを

科学技術は人間中心主義で活用されるべきです。だからこそ、STEM教育もグループの対話の中で取り組むことが大切です。



重ねて、どんなにぎわいのある町にしたのかを丁寧に聞き取っていきました。その結果、買い物客が集まるということだけではなく、どこから、どういう人たちが集まる町にしたいのか、町の理想の状態を描くことができたのです。

中野 STEM教育を通じて、自分の情熱を他者に伝えるスキルを身につけることができれば素敵ですね。みんな理想の姿を語り合い、よりよい社会をつくっていくためには、文系の生徒にも統計などのリテラシーが必要であり、一方、理系の生徒は、数学や物理そのものを楽しむだけでなく、そこからどのような社会的価値が生まれるのかを考える機会が必要なのだと感じました。

今日の学びを
自校の指導につなぐ

思いとデータで語り合い、
人がつながる経験を
生徒に積ませたい



STEM教育は、社会をよりよくしていくための共通言語を学ぶ教育だと思えました。データを使って話すことで、「この分析にはこういう観点も必要では」となどと、改善のための具体案を得やすくなるからです。他者とのつながる力を生徒に養う機会として、STEM教育は高校時代にこそ不可欠だと思えます。生徒がSTEM教育を経験することで、探究学習などに「ここまでたどり着いたけれど、この先が分からない」といった対話が生まれるはずで、「一緒によりよい社会をつくらう」と生徒の意欲を高めながら、STEM教育を通じて問題解決を目指す場を学校につくりたいです。

あるグループで取り組んでいる「理想のレトルトカレーのパッケージ」にたどり着くまでのプロセス。理想の状態を規定する要因をブレインストーミングを通じて洗い出し、KJ法などで整理・分析していく。その後、グループ内でパッケージにどのような機能を持たせればよいのかを考え、統計的手法を用いて検証する。





地域の実態を把握し、住民とともに 地域の未来を支える人材を育成

高知大学 地域協働学部



地域への取材を通じて、振興に向けた アイデアを練り、具体化させていきます

2・3年次には、同じ地域に関心を持つ学生がグループになり、実習に取り組みます。2年次1学期には、1つのグループが2～3の少人数チームに分かれ、チームごとに取材や調査をして地域振興策を立案。2学期の初めにグループ内で発表し合い、グループとして具体化させる振興策を決めます。(拜藤さん)

異世代間の交流を持続的に促進できるよう、 取り組みを企画・実施しました

私たちの実習先では、少子高齢化が進み、地域の伝統文化が継承されないという課題がありました。そこで、異世代間の交流を持続的に促進できるよう、地域の小学校と連携し、子どもが地域の高齢者に伝統文化などを学ぶ取り組みを企画。2年次2学期から定期的の実施しました。私たちも、江戸時代から続く地域産業の和紙づくりを体験しました。(幸村さん)



実習に協力してくれた地域の人たちに 感謝の気持ちを改めて伝えます

2・3年次の終わりには、地域の人たちに向けた学習成果報告会を実習先で行います。実習に協力してくれたことへの感謝の気持ちも、改めて伝えました。協働には、そうしたコミュニケーションが欠かせないと思います。(幸村さん)

連携先の地域組織や住民らと協働し、地域振興を図る

高知大学地域協働学部は、地域の住民や自治体などと連携して地域振興を担う人材を育てるために設立された。法律や環境など、地域課題に関連する様々な分野の科目を開講するとともに、地域の実態を理解した上で具体的な方策を提案できるようにするために、フィールドワークを重視した、2つの柱を設けている。

1つは、1～3年次に週1回、4時間連続で設定される実習だ。1年次には、大学が連携協定を結ぶ県内の複数の地域組織を訪問し、地域の人たちと交流しながら、各地の魅力や課題を探る。そして、2・3年次



地域協働学部
地域協働学科4年
幸村ひかる
ゆきむら・ひかる
沖縄県立向陽高校卒業。
コミュニケーションを通じて
地域の問題解決に関心
があり、同学科に入学。



地域協働学部
地域協働学科3年
拜藤紘希
はいとう・ひろき
広島県立海田高校卒業。多
くの学問を横断的に学べる
点に魅力を感じ、同学科に
入学。

には、1年次の訪問先から関心がある地域を1つ選択し、同じ地域を選んだ学生同士がグループになって、振興策を練り上げる。3年生の拜藤

教希さんら10人のグループは、県の西南部の沿海地域で実習を行っている。同地域では、観光施策の目玉として、県の出資を受けたNPO法人

が漁師と協働でホエールウォッチング事業を実施しているが、思うような業績が上がらなかったため、拜藤さんらはその原因解明に取り組んだ。

「県やNPO法人の職員、漁師にインタビュー調査を行うと、改善したい点などが三者の間で食い違っており、コミュニケーションに課題があることが分かりました。そこで、三者が互いの考えを共有できるようにSNSの活用を提案し、その環境の整備を進めています」（拜藤さん）

1年次から自由に研究を積み重ね、卒業論文を作成

もう1つの柱は、学生一人ひとりが自由にテーマを決め、休日や長期休業期間なども活用して取り組む研究活動だ。1〜3年次には「地域協働研究」の授業で定期的に研究の進捗を発表し、4年次には研究の成果

を卒業論文にまとめる。

4年生の幸村ひかるさんは、1年次に県産のイノシシや鹿の肉を用いた料理を食べ、そのおいしさに感動したことなどがきっかけで、「野生鳥獣の利活用」を研究テーマに設定。

県内各地の猟師や、猟師から獲物を購入する食肉処理施設を繰り返し訪問し、聞き取り調査を重ねた。その結果、猟師間では、「狩猟の場所を巡るトラブルの発生」、食肉処理施設では、「在庫量が多い鳥獣の買い取りを断らざるを得ないことによる猟師との関係悪化」などが、課題として見えてきたという。

「ジビエ（*）の人氣が高まっている現在、野生鳥獣は地域振興のための貴重な資源になります。しかし、県内の狩猟や食肉処理の現場についての研究は少なく、実態がよく分かっていませんでした。そこで、卒業論文は、県内の野生鳥獣の利活用を促進する上での課題と、その要因分析をテーマにすることにしました」（幸村さん）

授業で習得した知識・技能がフィールドワークを支える

フィールドワークでは、授業で学

習した内容を活用する場面が多いという。具体的には、地域行政についての授業で自治体における意思決定の仕組みを学んだことが、県の職員へのインタビュー調査に役立ったと、拜藤さんは語る。

「自治体の各部署への質問内容を前もって精選できたことで、効率的に取材を行いました。また、『ファシリテーション演習』では、相手の目を見て話し、相づちを打つなど、相手が本音で話しやすくなるような雰囲気づくりの工夫を学びました。そのスキルが、フィールドワークでの多様な人たちとのコミュニケーションに生きました」

同学部では、地方企業など、地域の経済や暮らしを支える職場に就職する卒業生が多く、地域貢献への意欲の高さがうかがえる。幸村さんは、高知県庁への就職が内定した。

「4年間の学びを通して、地域課題の当事者と向き合うことの大切さを実感しました。そこで、常に地域のニーズをくんで、それを具体的な施策に反映させられるよう、公務員の道を選びました。将来的には鳥獣対策課に所属し、自分の研究成果を職務に生かしたいと考えています」

大学の思い

地域課題を粘り強く探究し、解決策を見いだしてほしい



地域協働学部
教授
内田純一
うちだ・じゅんいち

本学部では、学生がフィールドワークで得た学びを深められるよう、カリキュラムを工夫しています。例えば、フィールドワークを通して、学生は自分に不足している知識・技能に気づきます。そこで、実習や研究が本格化する2年次以降の自由選択科目は、地域の産業や生活と密接に関連する専門科目を中心に構成し、学生が必要に応じて履修できるようにしました。フィールドワークと座学を往還することで、学生の探究心も向上していきます。

フィールドワークでは、学生は自分の思い通りにいかない状況に直面します。地域課題は、様々な要因が複合して発生するケースが少なくないからです。つまり、まず何が原因か、必ずしも学生同士で相談し合うように伝えています。協働しながら粘り強く試行錯誤を重ね、課題を乗り越えてほしいからです。学生は、入学当初は「自分のために学ぶ」という意識でいますが、地域の課題を知る中で、「他者のためにも学ぶ」ことの大切さに気づきます。そうした姿勢にこそ、学部・学徳の本質があると私は考えています。

* フランス語「gibier」。狩猟によって捕獲され、食用される野生鳥獣の肉。



AI時代に求められる人材育成を目指し、 知能に関する知識・技能と人間力を育む

甲南大学 知能情報学部

台本を自動で生成して、 漫才を実演する ロボットを開発中

大学が10年前から開発に取り組む「漫才ロボット」をさらに進化させる研究に携わっています。漫才ロボットは、医療や福祉の現場で人に笑いを提供することを目的として開発されました。私は、その実証研究に携わるほか、台本自動生成機能を応用し、チャット形式で漫才を楽しむアプリも開発しました。(家根さん)



ボケ担当の
ゴン太です

ツッコミ担当の
あいちゃんです



人が音を認識する仕組みを解明し、 情報技術に生かす手法を研究

人の耳には、男性と女性が同じ音階で歌っていても、女性の声が高く聞こえる錯覚現象が起きます。管楽器の音でもその錯覚現象が起きるのかを、波形を分析しながら研究しています。(木下さん)

1年次は、情報科学やプログラミング、数学の基礎をいずれも演習形式で学んでいく。例えば、「プログラミング演習Ⅰ・Ⅱ」は、プログラミング言語の基礎を習得し、基本的なプログラムを作成する科目だ。4年生の木下歩美さんは、同科目を次のように振り返る。

1年次から演習形式の 授業で主体的に学ぶ



知能情報学部
知能情報学科4年
木下歩美
きのした・あゆみ
兵庫県立有馬高校卒業。
IT系企業に就職予定だが、
教職課程も履修している。



知能情報学部
知能情報学科4年
家根和希
やね・かずき
兵庫県立赤穂高校卒業。学
会発表で学生奨励賞を受
賞。IT系企業に就職予定。

「1クラス15人で、先生との距離が近く、自分で手を動かしながら学べるため、意欲的に取り組みました」

少人数で問題解決に取り組み、社会で必要な力を身につける

2年次は、情報通信やネットワーク理論などを学ぶ「Webコミュニケーション」、人間対象の認知科学などを学ぶ「ヒューマンインテリジェンス」、人工知能やロボット工学などを学ぶ「マシニングインテリジェンス」の3コースに分かれ、各専門科目の中から、自分の興味に合わせ履修する(*1)。

特徴的な科目は、各コースにある「プロジェクト演習」だ。学生は「ロボット製作・制御実験」「ネット店舗の構築」「携帯ゲームの開発」などのテーマから1つ選び、6人程度のメンバーで課題に取り組む。問題分析から、解決策の発見、成果の発表までの一連のプロセスを通じて、問題解決の流れを学ぶ。Webコミュニケーションコースの科目を中心に履修している4年生の家根和希さんは、「携帯ゲームの開発」に取り組んだ。

「私のチームは、目標を高く掲げ

すぎてしまい、6割程度しか開発が終わりませんでした。リーダーを補佐する役割の私が、目標の実現が難しいと思った段階で、計画の修正を助言すべきだったと反省しました」

低学年次からそうした実践形式の授業を通じて、学生は知識やスキルに加え、社会が必要となる協働性や社会性を身につけていく。

3年次前期には、「知能情報学実験及び演習」を履修。同科目はプレゼミと呼ばれ、学生は研究室を3つ選び、各研究室の授業を5週ずつ受け、後期から所属する研究室を検討する。

「2年次は、ヒューマンインテリジェンスコースの科目を中心に学んでいましたが、プログラミングや数学の授業に熱中しました。プレゼミで、情報や機械を扱うよりも、改めて人間に興味があることに気づき、音声科学が専門の北村達也教授の研究室に入りました」(木下さん)

北村研究室では、3年次後期に研究室のメンバーによる小学生向けのプログラミング教室を開催した。

「どのような教材を使ってどのように教えるのか、一から考えました。プログラミングを教えるのは想像以

上に難しく、分かりやすく説明できないのは、自分の理解不足が原因だと痛感しました」(木下さん)

1年生が参加可能なプロジェクト活動もある

家根さんは3年次後期からWebコンピュティングが専門の灘本明代教授の研究室に入り、「漫才ロボット」の研究を行っている。

「4年次に私が取り組んだのは、がん患者の方に『漫才ロボット』を見ていただき、精神的・身体的な負担を少しでも軽減できないかという実証研究です。患者さんの笑顔の回数や持続時間、心拍数、アンケートなどから得られたデータを分析しました。目標を明確にし、期限を決めて取り組んだことで、学会で研究内容を発表できました」(家根さん)

「漫才ロボット」の研究は、大学の正課外プロジェクト「AIロボット学びプロジェクト」でもあるため、研究室に所属していない1年生でも参加が可能だ。

「研究室で学んでいるウェブ以外の知識も先輩や仲間から吸収することができて、とても充実しています」(家根さん)

大学の思い

IT社会でリーダーシップを 発揮できる人材を育成



知能情報学部
知能情報学科教授
北村達也
きたむら・たつや

知能情報学部の特徴は、インタラクティブな教育を実践していることです。1年次は「基礎演習」という8人程度で大学の学びの基礎を習得する科目があり、2年次には学生が協力して1つの作品を作り上げる「プロジェクト演習」があるなど、教師と学生、学生同士が相互に刺激し合う、密度の高い学びを実現しています。

また、本学では、社会でリーダーとなる人材の育成を目指し、何年生でも参加できる正課外の「KONANプレミア・プロジェクト」を実施しています。例えば、家根さんのプロジェクトでは、展示会に「漫才ロボット」を出品するため、メディアから取材を受ける機会も多く、表現力など、社会で求められる力も鍛えられます。そうした取り組みが、100%という高い就職率につながっています(*2)。

2021年度からは、最新の研究動向に合わせ、現在の3つのコースを、6つのコースへと再編予定です。学生の関心の高いAIやクラウドなどが学べる領域を強化し、より幅広く情報技術を学べる環境を整えていきます。

*1 同学部のコース制では、複数のコースの科目を自由に履修することができます。 *2 2018年度実績。

これからの会議・研修のあり方、つくり方

新学習指導要領等に向けて、教師同士の日常的な学び合いが学校現場に求められていることを受け、学校におけるこれからの会議・研修のあり方やつくり方について考えてきた本コーナー。

最終回となる今号は、本コーナーの総監修を務めてきた「三四郎の学校」日賀優一事務局長が、これまで読者モニターから寄せられた会議・研修における代表的な課題に取り組む上でのヒントをお伝える。

読者の声に応える

これからの会議・研修のあり方を 実現するファイナルヒント

「三四郎の学校」事務局長 **日賀優一**

ひが・ゆういち 「答えが1つではない問い」を考える中高生向け対話型ワークショップを主催する「三四郎の学校」事務局長。本誌 2016 年 6 月号で紹介した長崎県立諫早高校での取り組みを始め、高校教師や社会教育従事者などを対象とした学びの場づくりにも携わる。本コーナーの総監修者。また、2019 年 3 月に VIEW21 編集部が主催したワークショップ「生徒の学びをデザインするカリキュラム・マネジメント」の監修者の1人。

先生方の
課題
1

「心得」「約束」を示しても、
会議に臨む姿勢が変わらない

教科担任会で、「生徒のよいところ」をたくさん挙げてもらおうとしたところ、1人の参加者がなぜか生徒の問題点をばかりを挙げ、ほかの参加者もそれに同調してしまい、困惑した。

具体的なエピソードを話す場であると伝えたのに、「そもそも」「教育とは」といった原則論の応酬になってしまい、会議が少しも進まないことがある。



取り組みのヒント

「自校の生徒への育成を目指す資質・能力」などのテーマで先生方が話し合いを行う時、司会・進行役の先生は会議の流れに従って、「まず、本校の生徒のよいところを具体的に挙げてください」「グループの全員が発言できるように1人1分程度で」といったことを、会議の「心得」「約束」として提示します。しかし、一部の参加者にそれらを理解してもらえず、期待したように話し合いが進まないことがあります。

にもたらされるのかを司会・進行役の先生が語り、全員に伝わったことを確認して会議を始めます。

グループでの話し合いの場合、心得や約束を体現する存在として、いくつかのグループにサブファシリテーターを配置することも有効です。信頼できる先生に、事前に心得や約束を説明し、実際の会議の場で、「発言は1人1分だそうですよ。では、私が1分計りますね」などとタイムキーパーを務めてもらったり、「生徒のよいところを具体的に……なるほど、悪いところではなく、よいところですね」などとメンバーが再認識できるように繰り返し返してもらったりします。サブファシリテーターを置けない場合は、司会・進行役の先生が会議の途中で、「黒板に書いた心得は、実践できていますか？」と全体に問いかけるとよいでしょう。

心得や約束は、常に意識させるようにすることがポイントです。司会・進行役の先生が、それらを黒板に大きく書くなど、全員に見える形で掲示することが有効な方法の1つです。その上で、心得、約束をただ一方的に示すのではなく、なぜ、それが必要なのか、その心得や約束を守ることでどんなよいことが会議の場

先生方の
課題
2

自由・対等に 発言することができない

議論の中で改革の機運が高まって、発言力のある人が批判的な意見を口にすると、誰もそれに反論ができない。

ベテラン教師の意向が全体に影響を与える場合が多い。参加者の大半が違和感を持っていても、若手や中堅の教師が突き崩すのはなかなか難しい。



取り組みのヒント

「新しいことを始めようとしても、一部のベテラン教師が、失敗した時のことばかりを心配し、なかなか第一歩が踏み出せない」「自分の意に沿わない意見が出ると、感情的になる人がいて、自由に意見が言えない」など、自由・対等な話し合いを実現させることに難しさを感じている読者の先生方も少なくありません。

確かに、ベテラン教師や管理職、あるいは発言力のある参加者の意見に疑問や反論を差し挟むのは、簡単ではありません。だからこそ、会議の最初の段階で、司会・進行役の先生が、「今日の会議では、出てきた意見のすべてについて、メリットとデメリットの要素を整理します」と周知し、**誰の意見であっても異なる角度から検証することを宣言**しておきます。併せて、その会議で話し合っているテーマ、つまり、会議の参加者が**最も**

優先して取り組むべき課題を、黒板など、参加者全員が見える場所に明記しておきます。失敗の可能性はあるとしても、チャレンジしていく必要がある課題を抱えていることを、参加者全員が忘れないようにするためです。

参加者の意見を対等に扱うためには板書を活用します。発言がある度に、司会・進行役の先生は、「今の意見の要点はこうですね」などと言って、議事録用のホワイトボードに発言内容を書きます。**ベテラン教師の意見も若手教師の意見も同じように板書**することで、**発言内容と発言主を切り離し、あくまで発言内容を評価する**という点を明確化することができ

ます（したがって、発言者名は記しませんが）。存在感のある参加者の発言をただ静かに聞いているだけですと、「何となく同意」の雰囲気生まれてしまいます。板書して、議論の**狙い**に載せましょう。

先生方の
課題
3

話し合いの内容が、意思決定に 生かされている手応えがない

学校で行われる会議などは、課題に対する具体策や問題解決の糸口が見いだせずに曖昧に終わることも多く、モヤモヤした気持ちが残る。

拡散させた思考をどのように収束させ、意思決定へとつなげるのかが分からない。話し合いと意思決定が分断されている。



取り組みのヒント

会議で多様な意見が出るようになって

が、それらが最終的な意思決定にどう結びつくのかを、参加者がよく理解できていないというケースは珍しくありません。学校の様々な課題についてプロジェクトチームや委員会が立ち上がり、教科や分掌を超えた話し合いが行われるほど、「私たちの今日の話し合いは、意思決定に生かされるのか」といった点が気になるのは当然のことです。

学校の会議で多いのは、話し合いの内容を踏まえて、参加者の中の1人、あるいは少数の人たちによって意思決定がなされるというパターンでしょう。校長やプロジェクトリーダー、プロジェクトメンバーが、会議で話し合わせた内容を持ち帰って意思決定する方法です。意思決定者は、多様な意見に耳を傾けるために会議に参加しているわけですが、実は心

の中には「自分なりの答え」を持っていて（それは時に無意識のうちに）、本当の意味で「耳を傾ける」状態ではないことがあります。それでは会議の参加者は、意思決定に影響を与えたという手応えを得ることができません。

司会・進行役の先生は、会議の冒頭で、これから話し合われる内容を、会議後に誰がどのように生かすのかを参加者に伝えます。その上で、**会議の途中、意思決定者に「ここまでの議論で、印象に残ったこと（共感したこと、違和感を持ったこと）は何か」を何度か尋ね**ます。意思決定者以外の参加者や司会・進行役の先生は、意思決定者が自分たちの議論をどのように理解しているのか、参加者の多くが重視しているのに意思決定者が見落として

いる点はないかを確認することで、話し合いが意思決定に生かされるのだと、参加者は手応えを感じられるでしょう。

ベネッセコーポレーション「現代人の語彙に関する調査」結果分析

高校生の「探究的な学習活動」への取り組みは「語彙力」の高さに影響

ベネッセコーポレーションでは、全国の高中生から社会人までを対象に「現代人の語彙に関する調査」を、2016年から実施している。その結果から、「学校で自分で課題を立てて情報を集めて整理して、調べたことを発表する」といった、「探究的な学習活動」に取り組んでいる高校生は、取り組んでいない高校生よりも「語彙力」が高い傾向が見られた。

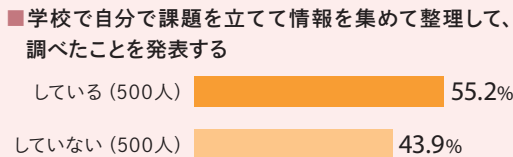
※本調査では、対象の言葉のうち回答者が「知っている」と答えた割合をその人の「語彙力」としている。

高校の新学習指導要領は、2022

年度から年次進行で実施される予定だが、現行の「総合的な学習の時間」から改まる「総合的な探究の時間」については、19年度以降の入学生（現高校1年生）から適用される移行措置が採られている。そうした背景もあり、生徒が自ら課題を設定する「探究的な学習活動」に取り組む高校が増えている。

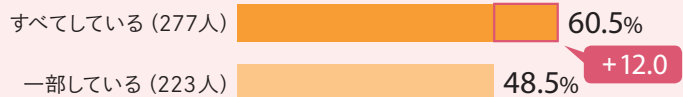
今回ベネッセコーポレーションが行った「現代人の語彙に関する調査」（以下、本調査）の結果を、高校生の「探究的な学習活動」への取り組み状況と「語彙力」との間に、どの

図1 「探究的な学習活動」の取り組み状況による「語彙力」の違い



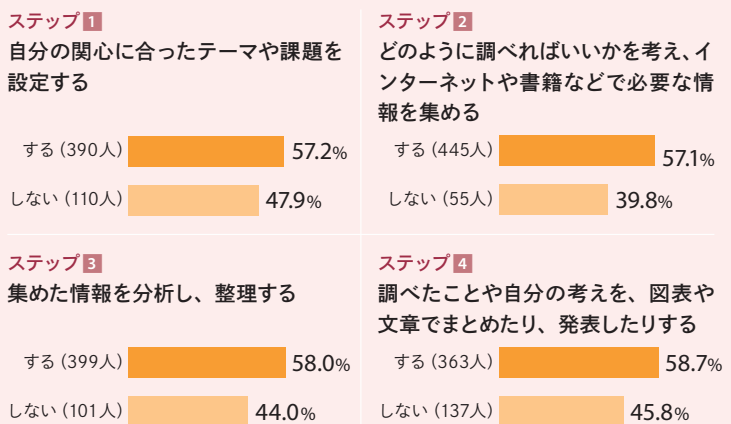
注1) 「している」は当該設問に「よくしている」「ときどきしている」と答えた人の語彙力。「していない」は当該設問に「あまりしていない」「まったくしていない」と答えた人の語彙力。
注2) 数値は、小数点以下2桁目を四捨五入して計算。
注3) 上図では、高校生の語彙力を掲載。

図2 「探究的な学習活動の具体的なステップ」の取り組み状況による「語彙力」の違い



※「すべてしている」は、1～4のステップ全部に取り組んでいる対象。

■それぞれのステップごとの取り組み状況



注1) ステップ1～4の図は、「探究的な学習活動の具体的なステップ」についての数値。「する」は当該設問に「よくする」「ときどきする」と答えた人の語彙力。「しない」は当該設問に「あまりしない」「ほとんどしない」と答えた人の語彙力。
注2) 数値は、小数点以下2桁目を四捨五入して計算。
注3) 上図では、高校生の語彙力を掲載。

ような関係があるのかに着目して、紹介する。

「探究的な学習活動」に取り組む高校生の「語彙力」

「探究的な学習活動」に取り組んでいる高校生は、調査対象の半数であった。そのような学習活動に取り組んでいる高校生は、取り組んでいない高校生よりも、「語彙力」が高かった(図1)。

さらに、「探究的な学習活動」を4つのステップに分けて「語彙力」を見たところ、「すべてしている」高校生の「語彙力」は、「一部している」高校生の「語彙力」よりも12・0ポイント高かった(図2)。このことから、4つのステップすべてに取り組むことが、高校生の「語彙力」をより高めることにつながる可能性があると考えられるのではないだろうか。

「社会の変化」や「新しいこと」への前向きな意識と「語彙力」

「総合的な探究の時間」では、新時代を生きる生徒に求められる問題解決能力と主体的な学びの姿勢を身につけさせることを目標としている。生徒が社会の変化に向き合おうとしている意識と「語彙力」には、どのような関係があるのか(図3)。「社会で必要とされるスキルや能力は時代と共に変わっていくと思う」と考えている高校生は、そう考えていない高校生よりも、「語彙力」が13・9ポイント高い結果となった。また、「生涯にわたり新しいことを学び続けたい」と考えている高校生は、そう考えていない高校生よりも「語彙力」が12・3ポイント高かった。その傾向は、高校生だけではなく、20・30代の社会人、40～60代の社会人でも同様で、「社会の変化に対応していこう」といった意欲や、「継続的に学び続けたい」といった意識を持つことが、視野を広げ、主体的に自分の将来を築いていく姿勢につながり、語彙力を高めることに結びついていると言えそうだ。

図3 「社会の変化」や「新しいこと」への意識の差による「語彙力」の違い

項目	回答	高校生			大学生			社会人(20・30代)			社会人(40～60代)		
		回答者数	平均語彙力	差	回答者数	平均語彙力	差	回答者数	平均語彙力	差	回答者数	平均語彙力	差
社会で必要とされるスキルや能力は時代と共に変わっていくと思う。	あてはまる	857	51.5	13.9	849	62.4	8.4	402	57.9	14.5	433	69.8	13.4
	あてはまらない	143	37.6		151	54.0		98	43.4		67	56.4	
社会で必要とされるスキルや能力が変わった時には自分で努力して身につけたいと思う。	あてはまる	818	51.6	11.3	828	62.2	6.2	358	58.7	12.8	339	70.8	8.7
	あてはまらない	182	40.3		172	56.0		142	45.9		161	62.1	
生涯にわたり新しいことを学び続けたい。	あてはまる	539	55.2	12.3	728	63.7	9.5	307	61.1	15.6	304	70.8	7.1
	あてはまらない	461	42.9		272	54.2		193	45.5		196	63.7	

注1) 上記の図は「社会の変化」や「新しいこと」についての設問に対する数値。「あてはまる」は当該設問に「とてもあてはまる」「まああてはまる」と答えた人の回答者数と語彙力。「あてはまらない」は当該設問に「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と答えた人の回答者数と語彙力。
注2) 数値は、小数点以下2桁目を四捨五入して計算。

「現代人の語彙に関する調査」概要

- ◎ 「Literas 論理言語力検定(*1)」を主催するベネッセコーポレーションが、全国の高校生から社会人までを対象に実施。
- ◎ 第4回は2019年7月に実施し、回答者数は3,000人。
- ◎ 語の難易度・分野・バランスを考慮して、「辞書語彙(*2)」230語、「新聞語彙(*3)」220語を選定。これらの「熟知度(*4)」を調べ、現代を生きる人々の言語活動の実態、及び年代、生活、行動などによる「語彙力(*5)」の違いを明らかにすることで、現代人に必要な言葉の力を高めるにはどうしたらよいかを検討することを目的とする。
- ◎ 詳しい調査結果は下記をご覧ください。
<https://literas.benesse.ne.jp/>
- *1 「Literas 論理言語力検定」はベネッセコーポレーションの主催で、2019年11月より実施している検定です。学校単位でのお申し込みとなります。
- *2 主に国語辞典に掲載されている、文章や会話を理解し、的確に表現するために必要な語彙。
- *3 新聞に掲載されることの多い、社会生活に必要な基礎知識や時事知識に関する語彙。
- *4 調査対象の各語について、「知っている」と回答した回答者の割合。
- *5 各回答者が、自身が回答した調査対象語のうち、「知っている」と答えた語の割合(各回答者が「知っている」と答えた語の数/回答した語の数×100(%))。

高校生と親世代の語彙の世代間ギャップ

高校生が親世代より知っている語彙の多くは、SNSなどでよく使われるひらがなやカタカナの短い言葉に集中しているが、記述式試験や、推薦入試で課される小論文・面接では、そうした言葉は通用しない。2018年のOECD「生徒の学習到達度調査(PISA)」で、日本の「読解力」の平均得点が落ち、順位も前回の8位から15位に下がったことから、「読解力」を支える「語彙力」の低下が危惧されている。

順位	語彙	高校生が親世代よりも「知っている」割合が高い語			親世代が高校生よりも「知っている」割合が高い語			
		高校生	親世代	差	高校生	親世代	差	
1位	いつメン(いつものメンバー)	63.5	9.0	54.5	胸算用	20.5	76.0	55.5
2位	とりま(とりあえず、まあ)	75.0	22.0	53.0	こきおろす	30.0	83.0	53.0
3位	りょ(了解)	73.5	24.0	49.5	骨子	20.0	67.0	47.0
4位	ツイキャス(ライブ配信サービス)	61.0	17.0	44.0	左団扇(ひだりうちわ)	40.0	86.0	46.0
5位	タピる(タピオカ入りドリンクを飲む)	56.5	15.0	41.5	未曾有(みぞう)	47.5	93.0	45.5
6位	パリピ(partly peopleの略語)	81.5	42.0	39.5	忌憚(きたん)	16.0	61.0	45.0
7位	あり寄りのあり(断定を避けた「あり」の表現)	52.5	15.0	37.5	勘案	22.0	66.0	44.0
8位	わず(過去のできごと・was)	44.0	9.0	35.0	気炎を上げる	13.0	57.0	44.0

注1) 差が大きい順に8語ずつ掲載。注2) 親世代=社会人40～60代。
注3) 数値は語の熟知度(%)。小数点以下2桁目を四捨五入して計算。

2019年12月号へのご意見

教師主導の外発的動機づけの再考を

12月号の特集の座談会で言われていた「受験勉強が目的化している」は、まさにその通りだと思った。生徒が身につけるべき資質・能力が変わる中、私たち教師の指導が変わらないことに焦りを感じている。主体性の低い生徒を目の前にすると、どうしても教師主導で外発的な動機づけをしてしまっているのが現状だ。そうした指導を見直すべきと、指摘されているような気がした。

石川県 匿名希望

「未来は現実から切り開くもの」と悟らせたい

12月号の特集で、岡山県立倉敷青陵高校の田中誠一郎先生が語っていた「自分の可能性について考えたり、自分の思い描くキャリアと実社会を照らし合わせたりすることは、生徒の成長にとって必要なプロセス」「生徒の心を揺さぶり、葛藤させる場を意図的につくる」という意見に同感だ。生徒の多くは、社会がどのようなのか、新聞等で報道されている事柄が自分の将来とどうかかわるのか、教師が示さないと、自分事として捉えることがなかなかできない。自分の未来を現実の中に見だし、たくましく未来を切り開いていくことを、生徒に悟らせたいと考えている。

和歌山県立橋本高校 寺田順子

資質・能力の育成をする課題や定期考査に

「高3・0学期の指導」がテーマだった12月号の特集

を読み、新しい学力観に対応するためには、生徒の主体的な学習をいかに支援していくかが鍵なのだと分かった。私は、日々の課題や定期考査は、授業内容の確認を目的に行くと捉えていたが、作問の工夫などによって資質・能力の育成を目指した場になるというのは、自分にとって新しい気づきだった。

静岡県 匿名希望

志を高く、主体性を持たせるために

12月号「指導変革の軌跡」の岡山県立笠岡高校の取り組みは、学習態度が受け身になりやすい生徒に、いかにして「志」を高く持たせるかが課題である本校にとって、とても参考になった。本校でも地域と連携した探究学習を行っているが、生徒がいかにして主体的に課題に向き合うように活動を進めていけばよいのか、指導改善を図る必要があると考えさせられた。

和歌山県 匿名希望

自分が支えられている言葉を後輩に伝えたい

12月号「教師を育てた言葉たち」の岡山県立総社高校の三村美紀先生が語ったエピソードを読み、教師は先輩教師や家族の言葉に支えられているのであり、そうした言葉を後輩の教師に伝えていくことが大切だと感じた。私は、生徒に「素直さと闘争心が大切」と常に伝えているが、それは教師にとっても同じだと思っている。

愛媛県立松山北高校 大谷修一

OFF SHOT



「働き方改革」という言葉を学校で聞くことが多くなりました。弊社も、在宅勤務など、様々な取り組みをしています。その中で、働くオフィス環境も話題に上がります。私も、よいオフィス環境はどのようなものか、よく考えています（オフィスにはあまりないのですが、笑）。今号の特集の取材で訪れた北海道・私立札幌新陽高校の職員室は、いわゆるフリーアドレスと呼ばれる形で、自分の机を持たず、好きな場所に座るような形式になっていました。個人情報を取り扱うことが多い学校ならではの工夫として、グレーのじゅうたんは教師のみが出入りできるエリア、グリーンは生徒と教師の両者が使えるエリアなどと区分けしていました。「目的」をしっかり共有できていれば、「形式」が変化したとしても、柔軟に対応できるはず。札幌新陽高校の改革の勢いを感じました。（荻原）

『VIEW21』高校版 公式アカウント

LINE@

友だち募集中!

『VIEW21』高校版や教育に関する最新情報をタイムリーにお届けします。*お友だちの登録方法は、右の2次元バーコードを読み取っていただくか、LINEアプリの「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加をお願いいたします。



VIEW21 高校版 2020 4 月号

次号は 4月15日発行 (予定)

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

教師を育てた 言葉たち

No. 018

石川県立金沢桜丘高校 崎山寛之先生

さきやま・ひろゆき

◎教職歴9年。同校に赴任して1年目。数学科担当。「石川県高等学校教育課程研究会(数学)」や「金沢工業大学第16回数理工教育セミナー」などの研究会で発表を行うなど、小・中学校や高校の教師と積極的に情報交換を行い、授業力向上に努めている。



初 任校は、勉強に苦手意識を持つ生徒が多い学校でした。教えることが好きで教師を目指した私は教材研究に勤しみ、4年目にはある程度、生徒のつまずきを予測して授業ができるようになりました。そんな頃、ある生徒から「なぜ、数学を勉強しなければいけないのですか」と問われたのです。私は、「数学ができないままだと卒業できないよ」と答えながら、「聞いているのはそんなことじゃないのだろうか」と思いました。しかし、その時は、そう答えることしかできませんでした。

なぜ、数学を勉強しなければいけないのか。生徒が納得する答えを求めて、同僚や先輩に相談しました。ある時、先輩が、「educationの語源は、“引き出す”、“養う”、という意味の言葉だ」と、私に教えてくれました。教師が解き方を分かりやすく教え、生徒にそれを確実に理解させるのが教育ではないのか？ますます分からなくなってしまった私は、生徒と話してみたくなり、休み時間に「今日の授業はどうだった？」などと聞いてみることにしました。

生徒と話するうちに分かったのは、理解できていると私が思った生徒が、実は理解が不十分であるなど、私の手応えと生徒の実態が必ずしも一致していなかったということです。授業に自信を持てるようになった半面、生徒の反応に鈍感になっていたのかもしれない、授業中の生徒をもっと丁寧に見ていこう……そう考えるようになってから、私の授業スタイルは、「分かりやすく説明する授業」から「大事なことは生徒に表現させる授業」へと変わりました。

8 年間の初任校での勤務を経て、金沢桜丘高校に転動しました。難関大学志望者が多い学校で、生徒の期待に応えられるようなレベルの高い授業をしようと張り切りましたし、実際、生徒は真剣に私の説明を聞いてくれました。ただ、不思議なくらいに生徒から反応が返ってこないのです。何回目かの授業を経てようやく私は、自分の授業が、大事なことを一方的に生徒に伝えるものになっていたことに気がつきました。大事なことは、教師が伝えるのか、生徒に表現させるのか、その違いで授業の様子は変わります。前任校の授業スタイルに戻すと、次第に生徒から反応が返ってくるようになりました。

授業の感想も積極的に聞くようにしたところ、ある生徒から、「説明と説明の間に、ノートを整理する時間がほしい」と言われ、早速次の授業では、説明が一区切りしたら、1分間、何も話さないようにしました。集中できる授業を生徒から教えてもらったのです。教師にとっては「**生徒の反応がすべてである**」という、私のその後の指導の道標となる言葉は、まさに生徒が与えてくれたものでした。

も しも今、「なぜ、数学を勉強しなければいけないのですか」と生徒に問われたら、私は「幸せになるために」と答えるでしょう。幸せに生きるためには、多角的に物事を考える力が必要であり、数学はその力を育むのに最適な教科だと思います。そして、これからも、日々の疑問や課題と数学とを結びつけた授業を模索しながら、生徒に「今日の授業はどうだった？」と尋ね続けていきます。

石川県立金沢桜丘高校 全日制/普通科/共学/1学年約360人/2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、金沢大、名古屋大、京都大、大阪大などに217人が合格。私立大は、東京理科大、同志社大、立命館大などに延べ619人が合格。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume6 2020年2月号
2020年2月14日発行 / 通巻第380号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング
©Benesse Corporation 2020

お客様
サービスセンター

[フリーダイヤル] 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17

9K VOL6

 Benesse